

特集 記事

東京の壊滅と再生 1923 - 20XX

編集委員会

企画・総括 村尾 修*

編集担当 矢守 克也**・石川 裕彦**・立川 康人**・澁谷 拓郎***

岡田 成幸***・片岡 俊一****

本特集記事について

村尾 修*

この記事を書いている2003年は、日本海中部地震(1983年)から20年、北海道南西沖地震(1993年)から10年、そして何よりも明治以降の地震で最大の死者を出した関東大地震から80年が経過した年である。関東大地震という痛々しい体験から80年が経過したということで、2003年には各地で様々な記念行事が開催された。また、近い将来発生するであろう東海・東南海・南海地震に関する話題も事欠かず、「もしも東京に大地震が発生したら・・・」という類の記事がメディアを賑わせている。このような背景から今回は「東京の壊滅と再生 1923 - 20XX」という特集記事を企画した。構成は以下の通りである。

1. Tokyo from 2003 to 1923

筑波大学社会工学系 村尾 修

2. 1923年関東地震における隅田川橋梁群の被害の概要

筑波大学機能工学系 庄司 学

3. 日本列島崩壊と再生のビジョン

漫画家 かわぐちかいじ/村尾 修

「1. Tokyo from 2003 to 1923」では2003

年現在の東京から80年の時間を遡り、東京という都市がどのように繁栄してきたかを包括的にとらえている。「2. 1923年関東地震における隅田川橋梁群の被害の概要」では都市社会基盤、主に橋梁という視点から関東大地震における被害について考察している。さらに「3. 日本列島崩壊と再生のビジョン」では、青年コミック誌「ビッグコミック」に連載中の「太陽の黙示録」作者であるかわぐちかいじ氏にインタビューを実施し、京浜大地震と富士山爆発が東京を襲うという物語を生み出したその経緯とそこに描かれている東京再

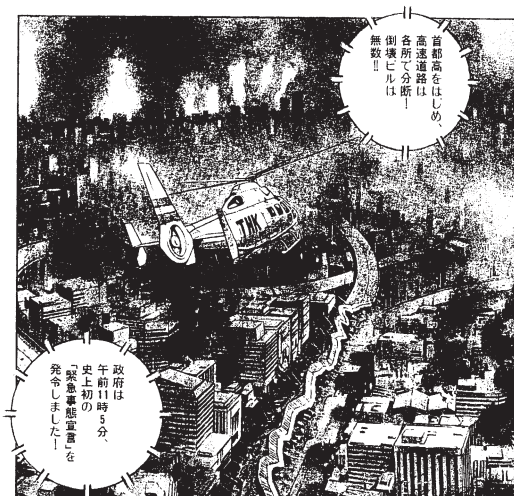


図0-1 ©かわぐちかいじ『太陽の黙示録』 (小学館ビッグコミック連載中)

* 筑波大学社会工学系

** 筑波大学社会工学系

** 京都大学防災研究所

*** 北海道大学大学院工学研究科

**** 弘前大学理工学部

生の構想について、語っていただいている。このような内容で、約 10 万人の死者・行方不明者を出した関東大地震からの 80 年間を振り返り、「関東大震災」の意味を再考し、また近い将来、東京を襲うであろう大地震についてもふれ、東京が今やらなくてはならないこと、東京のあるべき姿について、読者に問うてみたい。

1. Tokyo from 2003 to 1923

村尾 修*

1.1 はじめに

人口 1206 万人（特別区部 813 万人）。これが日本の首都東京の人口である。これは世界中の都市の中で 5 番目の規模である。東京における昨今の都市開発は凄まじく、2003 年の一年間をみても、六本木ヒルズ、汐留シティセンター、日本テレビタワー、東海道新幹線品川駅、品川グランコモンズ、東雲キャナルコート、そして青山パークタワーがオープンし、今後も品川シーサイドフォレスト、丸の内駅舎保存復元、日本橋一丁目プロジェクト（2004）、日本橋地区再整備（2005）、神宮前 4 丁目再開発計画（2005）、六本木ナショナル・ギャラリー（2006）、秋葉原駅前再開発計画（2006）、八重洲プロジェクト（2010）、六本木防衛庁跡地再開発計画（未）、豊洲東京都中央卸売新市場（未）と続いていく。大規模開発に明け暮れる現代の東京ではあるが、80 年前には関東大地震が発生し、その多くは焼け野原となっている。本章では東京におけるこの 80 年間を振り返り、関東大地震以降の時代の流れをつかみつつ、現代に生きる我々が何気なく見過ごしている都市東京の一側面をとりあげ、関東大地震あるいは戦災が現代の東京にどのような影響を及ぼしているのか、今一度確認しておきたい。

1.2 東京の都市構造

今から遡ることおよそ 400 年、江戸は徳川家康の参謀である天海により計画された。台地に囲ま

れた江戸の中心に江戸城を置き、江戸城本丸から「の」の字型に内堀、外堀を経て隅田川へと堀が巡らされている。これは天海が、風水において気のエネルギーが集束する「龍穴」を見出したことに端を発する。この計画はまた都市の防衛、物流、治水などを総合的に考えた結果でもあった。そして、この基本構造は現在の 7 つの副都心にも引き継がれている。こうして基本的な構造を与えられた都市東京であったが、過去に 2 回の壊滅的な破壊を経験している。そのひとつは 1923 年の関東大地震、そしてもうひとつは 1945 年の東京大空襲である。これらふたつの破壊からの復興計画と 1964 年に開催された東京オリンピックという大イベントの際に、（今では空想でしかなくなってしまった）東京の理想像が描かれたわけであるが、残念なことにその計画の多くが現実との壁を越えることができずにお蔵入りしてしまった。しかしながら、わずかに実現したいくつかの計画が現代の東京に至る近代化を促進したのも事実であり、良くも悪しくも、この 3 つの契機が現在の東京を語るための重要な要因となっている。

以下に 1923 年の関東大地震から現代までの約 80 年を包括的に振り返ることとする。

1.3 関東大地震以降 9 つの時代

首都東京が壊滅的な被害を受けた関東大地震が発生してから 80 年が経過した。その間に東京大空襲を経験しつつも、日本は国民総生産第 2 位、ODA 実績第 1 位、国連予算負担額第 5 位という国となるまでに成長した。この 80 年間の主なできごとを整理したのが表 1-1 から表 1-3 である。ここでは、日本または東京が辿ったこの 80 年間を時代背景に基づいて便宜的に 9 つに区分した。またこの 80 年間の変化を読むうえでの参考として、明治以降の東京の人口と GDP、および消費者物価指数と東京外国為替市場の推移についてグラフ化したものを図 1-1 および図 1-2 に示す。

【Phase_Be：関東大震災以前】 - 1923 年 8 月

江戸幕府が誕生し 100 年弱が経過した 17 世紀末に江戸の人口は 85 万人に達し、京都を抜いた。

* 筑波大学社会工学系

表 1-1 関東大地震以降の東京の都市形成年表 1

Phase	西暦	元号	内閣総理大臣	都知事	日本の政治と主な出来事	首都圏・東京都の主なできごと	都市形成に関する主なできごと(※主に東京都都市プロジェクト)	具体的なプロジェクト
Phase00-	1922 以前	大正11年 以前			浅草オースム人気	東京市(15区)		
Phase00+	1923 地震前 地震後	大正12年 大正13年	加藤友三郎 山本權兵衛		関東地震			帝国ホテル開業 丸ビル完成
Phase01	昭和初期	1924 1925 1926 1927	清原善吾 加藤嘉明		治安維持法 普通選挙法公布 ラジオ放送開始	帝都復興事業(→1930) 財団法人同業会設立		同業会2160戸の本通販任宅建設
		1928 1929 1930	若原壯次郎 田中義一		金融恐慌	地下鉄開通(上野-浅草) 小田急開通		同業会青山アパート
Phase02	昭和中期	1931 1932 1933 1934 1935 1936 1937	若原壯次郎 斎藤寅次郎 岡田啓介		金輸出解禁 ロンドン条約 満洲国建国	旅客空輸開始(東京・博多)		羽田飛行場
		1938 1939 1940	近藤文麿 近藤文麿 近藤文麿		日独防共協定締結 日中戦争 東京特種郵便法発令 第二次世界大戦(→45年)	山口貯水池の完成 大東京市誕生(新たに20区が設置され、35区となる) 人口580万人(NYに次ぎ世界第2位)		同業会江戸川アパート 築地中央卸売市場開場 帝国議会議事堂(現国会議事堂) 後楽園スタジアム
		1941 1942 1943 1944	近藤文麿 近藤文麿 近藤文麿		日独防共協定締結 日中戦争 東京特種郵便法発令 第二次世界大戦(→45年)	東京青龍流行		同業会江ノ島 同業会解散 東京港開港
Phase03	昭和後期	1945 1946 1947 1948 1949 1950	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック中止決定 東京オリンピック開幕式典		同業会解散 同業会開港
		1951 1952 1953 1954 1955	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
Phase04	経済復興期	1951 1952 1953 1954 1955	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		1956 1957 1958 1959 1960	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		1961 1962 1963 1964 1965	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		1966 1967 1968 1969 1970	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		1971 1972 1973 1974 1975	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		1976 1977 1978 1979 1980	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		1981 1982 1983 1984 1985	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		1986 1987 1988 1989 1990	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		1991 1992 1993 1994 1995	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		1996 1997 1998 1999 2000	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		2001 2002 2003 2004 2005	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		2006 2007 2008 2009 2010	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		2011 2012 2013 2014 2015	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		2016 2017 2018 2019 2020	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		2021 2022 2023 2024 2025	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港
		2026 2027 2028 2029 2030	吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂 吉田茂		東京大空襲 東京大空襲 東京大空襲	東京オリンピック開幕式典 東京オリンピック閉幕式典		同業会開港

表 1-2 関東大地震以降の東京の都市形成年表 2

	西暦	元号	内閣総理大臣	都知事	日本の政治と主な出来事	首都圏・東京都の主なできごと	都市形成に関する主なできごと(◆主要な東京都市プロジェクト構想)	具体的なプロジェクト
Phase05	1956	昭和31年	石橋湛山		国際連合加盟		首都圏整備法公布 道路白書「東京都市計画の道路の現状と将来」	
高度経済 成長期	1957	昭和32年	岸信介		日ソ通商条約調印	東京でガス中毒多発		夢の島ごみ埋立開始
	1958	昭和33年				狩野川台風(46万戸浸水)	首都圏整備計画	東京タワー(333m)
	1959	昭和34年		東龍太郎	伊勢湾台風		◆ネオ・トウキョウ・プラン/産業計画会議 ◆新東京計画案 -50年後の東京-/黒川紀章 ◆東京湾海上都市案/大高正人	
	1960	昭和35年	池田勇人		日米新安保条約調印	建築の高層化が日照権妨害として起訴 隅田川(関東一のトブ川)に 多摩川丸子橋付近の遊泳場が汚染	首都整備5ヵ年計画	
	1961	昭和36年				国電乗客押込用バイト400人を採用 隅田川花火大会中止	◆東京計画1961へリックス計画/黒川紀章 ◆麹町計画/大谷幸夫	東京文化会館
	1962	昭和37年			日中総合貿易覚書調印	都市にスモッグ発生 横浜港タンカー衝突事件 世界初の1000万都市へ		
	1963	昭和38年				国鉄鶴見事故		
	1964	昭和39年	佐藤栄作		日韓基本条約調印	東京オリンピック開催 「開発の格差」が問題に	日本最初の営業モルレル開業(浜松町-羽田空港) 第18回オリンピック東京大会 東海道新幹線開業	
	1965	昭和40年				夢の島からハエ大発生		東京カテドラル完成
	1966	昭和41年				全日空機羽田沖墜落事件	◆江東十字ベルト構想/東京大学高山研究室	
	1967	昭和42年		美濃部亮吉	公害対策基本法制定			帝国ホテル解体
	1968	昭和43年			川畑康成ノーベル賞受賞	小笠原諸島返還		霞ヶ関ビル(147m)
	1969	昭和44年			初の公害白書	30cm積雪史上新記録 公害防止条例制定	東名高速開通	国立近代美術館 江東地域再開発基本構想
	1970	昭和45年			大阪万国博覧会開催	歩行者天国始まる 立正高校で光化学スモッグによる吐き	◆東京再建計画/早稲田大学「21世紀の日本」研究会	世界貿易センタービル(152m)
Phase06	1971	昭和46年				成田空港用地強制明け渡し 不法爆発物事件 知事「ごみ戦争」を宣言	多摩ニュータウン入居	
都市問題 発現期	1972	昭和47年	田中角栄		沖縄復帰 日中国交正常化 札幌冬季オリンピック開催	東京湾「死の海」と調査結果発表 東京「世界一の物産高」都市		京王プラザホテル (新宿副都心開発の皮切り)
	1973	昭和48年			石油危機			
	1974	昭和49年	三木武夫					新宿三井ビル(224m) 新宿住友ビル(212m)
	1975	昭和50年			山陽新幹線全通 沖縄海洋博開催			
	1976	昭和51年	福田赳夫					安田火災本社ビル(196m)
	1977	昭和52年						
	1978	昭和53年	大平正芳		日中平和友好条約	成田空港運営開始 隅田川花火大会復活		新宿野村ビル(210m) サンシャイン60(240m)
	1979	昭和54年		鈴木俊一		東京サミット 「マイ・タウンと呼べる東京」		新宿センタービル(216m)
	1980	昭和55年	鈴木善幸					
Phase07	1981	昭和56年						
生活躍動期	1982	昭和57年	中曽根康弘		東北・上越新幹線開通		東京都長期計画 ◆アングラ東京構想/尾島俊雄	白鷺東地区防災拠点再開発
	1983	昭和58年			ファミコン発売	東京ディズニーランド開園 三宅島大噴火		
	1984	昭和59年			昭和天皇崩御		◆下町マンハッタン構想/尾島俊雄	
	1985	昭和60年			つくば万博開催			
	1986	昭和61年				東京サミット 土地価格急騰		アークヒルズ
Phase08	1987	昭和62年	竹下登		円高加速 NTT株上場 乗客回復宣言		◆東京2025計画/グループ2025	
バブル 経済期	1988	昭和63年						東京ドーム

表 1-3 関東大地震以降の東京の都市形成年表 3

西暦	元号	内閣総理大臣	都知事	日本の政治と主な出来事	首都圏・東京都の主なできごと	都市形成に関する主なできごと ◆超超高層計画/レネコン各社	具体的なプロジェクト
	1989 平成元年	宇野宗佑 海部俊樹					葛西臨海水族館
	1990 平成2年			桜並木祭 花とみどりの博覧会開催			東京芸術劇場
Phase09 平成不況期	1991 平成3年	宮沢喜一		バブル経済崩壊		新宿副都心から新都心へ	東京新都心行倉(24.5m)
	1992 平成4年			国連平和維持活動協力の法成立			東京新都心行倉(24.5m)
	1993 平成5年	細川護国			東京サミット 体供フロントマーケットクワーター完成(296m)	レインボープリンジ	江戸東京博物館
	1994 平成6年	羽田孜 村山富市		政治改革法定			聖路加ガーデン(221m) 新宿パークタワー(235m) 恵比寿ガーデンプレイス 新宿アイランド(190m)
	1995 平成7年		青島幸男	兵庫県南部地震	地下鉄有明線開通	世界都市博中止決定 臨海副都心オープン(ビックサイト・ゆりかもめ完成)	
	1996 平成8年	橋本龍太郎					
	1997 平成9年						
	1998 平成10年	小淵恵三		長野冬季オリンピック開催 明石大橋開通			品川インターシティ
	1999 平成11年		石原慎太郎				
	2000 平成12年	森喜朗					東京オペラシティビル(234m) 山王パークタワー(193m) NTT Docomo代々木ビル(240m) 代官山アドレステ
	2001 平成13年	小泉純一郎					清澄アイランドトリトンスクエア(195m) 愛宕グリーンヒルズ(187m) セルリアンタワー
	2002 平成14年			FIFA2002ワールドカップ開催			丸の内地区開発(丸の内ビル) ブルデュービルタワー 銀座中央通り開発事業(銀座並木通りビル) 汐留オフィス(東武本社ビル(210m)) 元祿布ビルズ竣工 泉ガーデン(201m)
現在	2003 平成15年					印刷会青山アパート解体	六本木ヒルズ(338m) 汐留シティセンター(216m) 日本テレビビル(194m) 東武東上線品川駅 丸の内線有明駅 有明ヒルズ 青山パークタワー
	平成16年 以降					つくばエクスプレス(2005) 有明地下鉄13号線(2007)	品川シーサイドフォレスト 丸の内線有明駅 日本橋一丁目プロジェクト(2004) 日本橋地区再開発(2005) 神楽坂4丁目再開発計画(2005) 六本木サヨナル・ギャラリー(2006) 秋葉原駅前再開発計画(2006) 八重洲プロジェクト(2010) 六本木防衛庁跡地再開発計画(未) 豊洲東京都中央卸売市場(未)

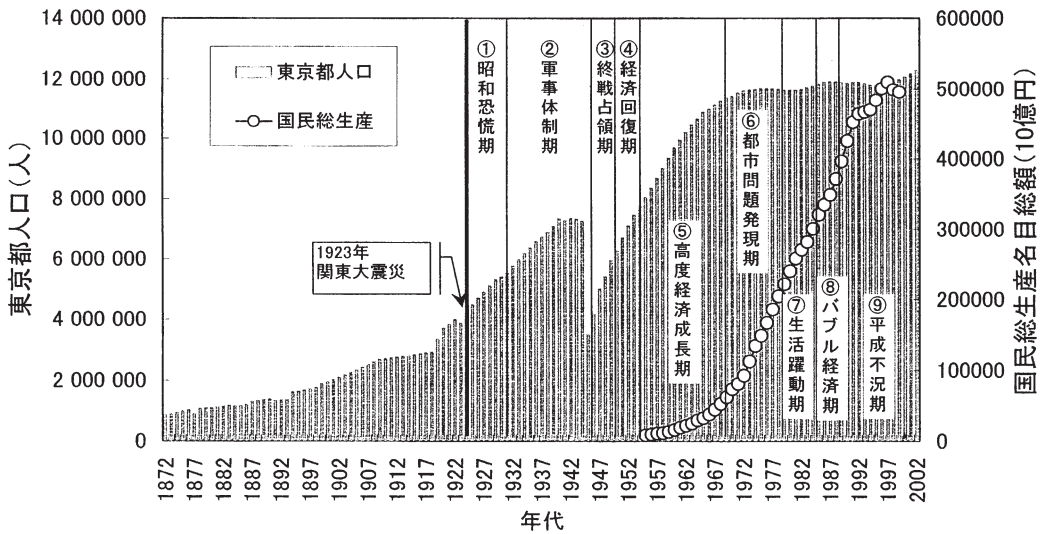


図 1-1 東京の人口と GDP の推移

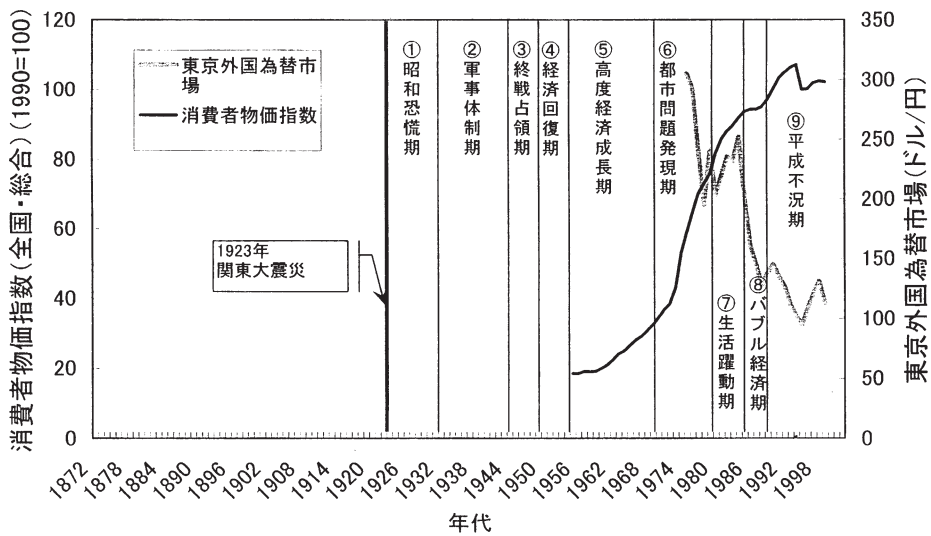


図 1-2 消費者物価指数と東京外国為替市場の推移

18 世紀には人口 100 万人に達し、19 世紀には世界一の都市となったと伝えられている。1900 年には 194 万人余りだった東京の人口は、関東大地震以前の 1920 年には約 370 万人と倍増していた。そして、関東大地震以前の 1914 年に第一次世界大戦が勃発した。日本の商品は東洋の各地に輸出され、日本は好景気となり、三井・三菱・安田・

住友などの財閥が日本の各産業に勢力を伸ばし、大きな力を持つようになった。一方で物価ははねあがり、米の値段も急激にあがった。やがて米が買えなくなった人々により米騒動が引き起こされ、その動きは全国的に広がった。また終戦とともに戦争に関連する商品は売れなくなり、1920 年頃から日本経済は目だって悪くなりだした。そんな

不景気の最中の1923年9月1日、関東地震は発生した。

【Phase__00：関東大震災発生】1923年9月1日
1923年9月1日午前11時58分、マグニチュード7.9の大地震が発生した。死者・行方不明者10万人、家屋被害約40万世帯の被害を出し、市街地焼失率は44%となった。(被害に関する詳細は2章にゆずる)

【Phase__01：昭和恐慌期】1923年9月 - 1931年頃

関東大震災の被害額は50億円から60億円にのぼり、不景気は一層ひどくなった。1927年には金融恐慌が起り、多くの銀行がつぶれる一方、財閥は一層力を持つようになった。そしてその後の世界恐慌は日本経済にも大きな影響を与えた。

関東大地震の翌日、元東京市長であった後藤新平は内務大臣および帝都復興院総裁に就任し、①遷都は行わない、②復興費用は30億円、③欧米の最新の都市計画を適用する、④都市計画実施においては地主に断固たる態度をとる、という4つの方針に基づく帝都復興計画を発表した。その内容は単に「都市復旧」を目的とするものではなく、環状高速道路網計画や、人口を関東平野全域に分散させるなど「都市改造」にまでふみこんだ大規模な都市計画案であったが、莫大な費用を要すること、当時一層力をつけてきた財閥や地主と関係の深い議員による大反対を受け、その規模は大幅に縮小され、「都市復旧」の域を出るものとはならなかった。しかしながら「帝都復興事業」として運河・道路・土地区画整理・公園などに近代的な都市計画手法をとり入れた初めての事例となった。都市計画上の主な成果としては以下のものが挙げられる。これらの事業はその後の戦災復興計画にも影響を与えた。

- ・3600 ha (焼失は3450 ha) の区画整理
- ・東京駅を中心とした環状路や放射線路からなる道路体系の完成
- ・幹線道路の舗装と街路樹の植栽
- ・緑地帯に縁取られた幅員44mの昭和通りと幅

員36mの大正通り(現靖国通り)の建設

- ・日本初となるリバーサイドパーク隅田公園の造成
- ・不燃構造の学校とアパートの建設

残念なことに、第二次世界大戦後、昭和通りの緑地帯はなくなり、隅田公園の一部も高速道路の敷地となった。

【Phase__02：軍事体制期】1931年頃 - 1945年

昭和の大恐慌による人々の不満は、大陸へ勢力をのばそうとする軍人たちに利用され、1931年には満州事変が引き起こされた。世界的不況の中でアメリカやイギリスがブロック化を図り、日本の経済進出が阻まれたため、日本は中国大陸へ進出し、不況を脱しようとしたのである。翌年1932年には満州国が建国され、1937年に日中戦争が勃発した。日中戦争は次第に泥沼化し、日本はその状況を打開するため、さらにアジア南部へと進出した。そして1939年第二次世界大戦が始まり、1941年には太平洋戦争が開戦した。

この時代、東京では1940年の皇紀2600年祭記念事業などの国家的な都市プロジェクトも動き始めていた。なお、隣接地域と統合し35区の大東京市が実現したのは1932年のことである。

戦時中の1945年3月に東京は大空襲を受け、焼野原となった。東京への空襲は終戦までに122回に達し、中央区、台東区、江東区など下町を中心に爆撃を受け、東京における死者は約9万2千から9万6千人、負傷者は12万人から15万人、家屋被害約70万から85万棟、罹災者は約300万人に達していた。同年8月、日本はポツダム宣言を受け入れ、無条件降伏をし、戦争は終結した。

【Phase__03：終戦占領期】1945年 - 1950年頃

戦後、マッカーサー総帥は日本を民主化するために、農地改革、婦人解放、労働改革など徹底的な改革を実施し、1946年には日本国憲法が公布された。

戦後の焼野原では、戦争で両親を失った戦災孤児たちが駅の地下道などにあふれ、物乞いや靴磨

きなどをして生きていた。混乱の中、上下水道や汚物処理施設の麻痺、食料不足、浮浪者と浮浪児の保護、治安の悪化、伝染病予防、急激なインフレなどの都市問題も浮き彫りになってきていた。日本政府は東京大空襲直後から戦災復興計画を作成していた。それはグリーンベルトや大通りなど、もしも実現していたら東京の景観が大きく変わっていたはずのものであったが、占領軍が敗戦国日本の首都東京に緑地帯や広い道路などモニュメンタルなものを造らせなかったことにより、実現したのは一部の区画整理などわずかなものでしかなかった。これは現在の東京の都市構造に大きな影響を与えている。

【Phase_04：経済回復期】1950年頃 - 1955年頃

敗戦後しばらくは日本経済は大混乱に陥り、国民の生活もどん底状態であったが、1950年に朝鮮戦争が勃発し、特需景気により日本経済は回復してきた。1951年にはサンフランシスコ平和条約により独立国としての主権を取り戻し、日本は新たな時代に突入した。そして1956年に国際連合への加盟が認められた。

【Phase_05：高度経済成長期】1955年頃 - 1970年頃

1955年には東京都の人口が800万人を突破し、資本金1億円以上の会社のうち、約50%が東京に本社を置くなど、企業・官公庁の集中が目立つようになってきた。この年以降、政府の住宅対策として大規模団地が開発され、各地に2DKの間取りを基準とした公団住宅が建設されていった。そして三種の神器（テレビ、冷蔵庫、電気洗濯機）を備えた2DK住宅での都市生活は国民の憧れの的となった。国民総生産が米ソに次いで第3位となったのは1967年のことである。1956年には首都圏整備法が公布された。これは中心部から15km以内の23区都市町村は「既成市街地」、その外側15kmから25kmは市街地を抑制し、東京への農産物の供給場所、刑務所・飛行場などの建設を行うための「近郊地帯（グリーンベルト）」、

そして25km以遠を東京の「周辺地帯」として衛星都市を形成するというものであった。

この時期には、高速道路、新幹線、東京タワー、霞ヶ関ビル、巨大コンビナートの建設など最新の建設技術を取り入れた東京の近代化を象徴する都市開発が各方面で進められ、また東京オリンピック開催前は空前の建設ラッシュとなった。

東京湾沿岸の大規模な埋立事業もこの時期に始まった。その結果、東京湾岸4000世帯の漁民が影響を受け、浅草や大森の海苔産業は壊滅してしまった。1960年には隅田川が「関東一のドブ川」と称されるようになり、遊泳場として賑わっていた多摩川丸子橋付近の河川環境が工場排水や動物の死骸などで悪化するなど、都市開発の悪影響が徐々に浮き彫りになってきていた。

近代都市東京としての都市ビジョンの作成、そして都市問題の解決のために建築家などが率先して巨大都市プロジェクト構想を提唱したのもこの頃であった。

【Phase_06：都市問題発現期】1970年頃 - 1980年頃

ユートピアとしての近代都市志向は1970年の大阪万博の実現によって頂点を迎えたが、その後では戦後の高度経済成長を支えてきた都市開発のつけが東京を確実に蝕んでいた。1960年代後半以降、国民の生活が豊かになったことと裏腹に、四大公害（四日市ぜんそく、水俣病、イタイイタイ病、新潟水俣病）の発生、大気汚染、水質汚濁、ごみ問題、交通問題、人口集中、自動車排ガス公害、そして自然環境破壊など国民の健康にも関わる様々な都市問題が徐々に表面化してきたのである。そして1973年の石油危機による省エネブームなどを契機として環境への意識が高まっていった。その結果、各種の規制が強化され、各地で緑地が整備され、下水処理場も建設されるようになった。そして旧江戸川、中川、綾瀬川、荒川、隅田川、多摩川などの水質改善策が施されるようになった。

【Phase_07：生活躍動期】1980年頃 - 1986年頃

1980年代に入ると国民生活も大きく変化した。西武百貨店の「おいしい生活」などのコピーが話題となり、生活の質が問われるようになっていった。カラーテレビ、ピアノ、自家用車が一通り普及し、テレビが家庭に2台あるという家庭も増え、日常の生活物資も豊かになり、消費生活も多様になっていった。またインスタント食品、冷凍食品、外食産業により食生活も変化した。この後のバブル景気の下地がこの頃にできあがっていったのである。この頃には高校や大学への進学率も上がっている。一方、住宅地や大学などが地価の高騰した都心から郊外へと移転し、1970年代から問題となっていた都市のスプロール化も一層進んだ。

【Phase_08：バブル経済期】1986年頃 - 1990年頃

1980年代後半に入ると次々と国営企業が民営化され、民間に活力が生まれてきた。この頃には円高が急加速し、またNTT株が上場し、株価も上昇していった。企業は土地を買いあさり、金融機関の資金援助も手伝い、首都圏には200mを超える超高層が次々と計画されていった。また1983年に開園した東京ディズニーランドは盛況となり、それをきっかけとして国民の余暇時間についても関心が高まり、リゾート開発やテーマパークなどが各地で計画・開発されていった。

【Phase_09：平成不況期】1990年頃 - 2003年

バブル景気に沸いた1980年代が終わり、1990年代に入った矢先の1990年2月に株価が暴落し、平成の大不況が始まった。これは戦後最も長い不況となり、失業者増、就職難など成熟社会に入った日本の将来像が問われる時代となった。都市にはバブル景気の負の遺産として不良債権による空地が多く発生し、100円パーキングと呼ばれる駐車場も目立つようになってきた。一方で地価は下がり、東京都の建築規制も緩和され容積率が大きくなったこと、そして都心回帰の流れも受け、最近では都心に次々と新しいスポットが開発されている。この時代には、環境への関心は地球規模へと発展し、1992年国連環境開発会議や1997年

温暖化防止京都会議などが開催された。そして、現在では環境を考慮したクリーンエネルギーの開発なども進められている。それでもなおかつ酸性雨、大量のごみ、ダイオキシン、タンカー事故による重油の海洋汚染などが新たな都市問題として問題視されている。

1.4 現代の東京に見られる都市空間の起源

ここでは我々が何気なく見ている東京の都市空間に焦点を当て、この80年間で東京が体験した2度の破壊とそこから復興がどのように影響してきたかを確認していく。現代の東京から1923年時の東京へと時代を逆行したいのである。

①秋葉原(⇒1868⇒)

この地には幕末まで秋葉神社という日除地があった。その「原っぱ」から「秋葉原(あきばはら)」という名がついたらしい。近くにはラジオ関係の大卸売商があり、駅を控えて交通の便にも恵まれたことから終戦後には電気器具商が続々と店を出し、今のような電気街ができあがっていった。

②銀座(⇒1872)

明治政府誕生後の東京にはまだ木造家屋が多く、浅草、新宿、南千住では頻繁に大火が発生していた。1872年には銀座・築地周辺で34町が焼失する大火が発生し、明治政府は首都にふさわしい防火都市として銀座煉瓦街を計画した。その名残が銀座1丁目から3丁目にかけて今も残っている。

③日本橋・築地(⇒1923⇒)

大正時代以前、東京の魚河岸といえば日本橋近辺のことを指していた。大正時代に入ると衛生や取引の面でさまざまな問題が生じ、魚河岸を築地に移転するという案が出され、1923年2月には「中央卸売市場法案」が帝国議会に提出され、そして3月に公布された。魚河岸のあった日本橋の住民達はその動きに対して反対運動を起し、移転は難航してしまっていたが、それを動かしたのが関東大震災であった。日本橋川は兜町付近にあった石油倉庫の大爆発により火の川となり、日本橋

魚河岸も壊滅した。その結果、難航していた移転問題もすぐに決着がつき、同年12月に築地にて中央卸売市場の営業が始まった。その築地中央卸売市場も約80年の幕を閉じ、豊洲中央卸売新市場に取って代わろうとしている。

④丸の内地区 (⇒1923⇒)

丸の内は震災以前から業務地区として役割を果たしていた。この地区の建物は地震による倒壊・焼失を免れたため、震災後にこの地区へのオフィス集積に拍車がかかり、現在の丸の内地区への布石となった。

⑤京浜工業地帯 (⇒1923⇒)

震災以前の工業地域としては本所の民間重化学工業や深川の食品・雑工業が目立っていた。関東大地震時には、多摩川から鶴見川までの神奈川県埋立地も大きな被害を受け、工場の倒壊、液状化、亀裂、防波堤の崩壊などが発生した。しかしながら大火災の発生した東京下町の工業地帯に比べ損害は少なかったため、埋立地の安全性が知られることとなり、東芝、富士電機、日清製粉、ライジングサン石油などが川崎や横浜の埋立地に工場を新設、移転するようになった。そして、第二次世界大戦直前には京浜工業地帯は急成長をとげ、日本最大の工業地帯となっていった。やがて1960年代になると過密化のため北関東へと工場が分散し、東京湾の工業化の中心は千葉県側へと移っていった。そして1980年代になると第二次産業から情報・サービス業を中心とした第三次産業へと産業構造が変わり、東京湾沿岸の土地利用形態もレジャー施設が増えてきている。

⑥新宿・渋谷・池袋および遊園地 (⇒1923)

現在、山手線の駅で最も賑わっている新宿・渋谷・池袋の賑わいの源泉は関東大地震以降にある。

1923年の関東大地震以降、罹災者は郊外とくに西部に移住し、市内人口は激減した。一方で、隣接地域では、人口倍増、都市化が急速に進み、その結果、「郊外に住み、市内に通勤する」という住居と職場の地域分化がこの時代に確立されていっ

た。そして、交通網の整備も進み、地下鉄や小田急線などの私鉄も次々と開通し、旧市域と新編入地の人・物の移動の増大により、接点にあたる新宿・渋谷・池袋などでは交通量が急増し、都心に準じる新たな中心地域へと変貌していった。私鉄各社は開発を行った宅地に旅客を誘致するために、二子玉川園(1925-85)、谷津遊園(1925-82)、多摩川園(1925-79)、豊島園(1926-)、向ヶ丘遊園(1927-2002)、京王閣(1927-47)など魅力的なレジャー施設を次々と開業させたのである。残念ながらこの中で現在でも残っているのは豊島園だけになってしまった。

また池袋駅前も、戦後の闇市としても繁盛していた。

⑦隅田川沿いの橋梁 (⇒1923)

隅田川の橋の大部分は木造だったため、関東大地震時には橋が焼け落ち、多くの人々が逃げ場を失った。これらの教訓を活かし、帝都復興局と東京市は橋の数を増やし、最新の橋梁技術を駆使した結果、千住大橋(1927)、白鬚橋(1931)、言問橋(1928)、吾妻橋(1931)、駒形橋(1927)、麩橋(1929)、蔵前橋(1927)、両国橋(1932)、清洲橋(1928)、永代橋(1926)などが建設された。当初は、「同一形式で橋を架けた方が安く復旧が早い」という意見も出たようだが、モダンなデザイン、新しい基礎工法の橋桁、特殊な橋梁形式、高張力鋼などを採用し、多様な橋梁が隅田川に姿を現した。その結果、これらの橋梁は今も人の目を楽しませてくれている。また関東大地震の復興橋として現お茶の水駅に隣接する聖橋もつくられた(昭和初期)。この「聖橋」という名前は湯島聖堂とニコライ堂を結んでいるところから名づけられた。

⑧同潤会アパート (⇒1924)

四半世紀もの間、表参道に欠かせない風景として親しまれてきた同潤会青山アパートが2003年春に解体された。現在は神宮前4丁目再開発計画として建設が進められているが、その起源は1923年の関東大地震まで遡る。

1924年に世界各地から寄せられた義援金1000万円を基金として、関東大震災からの復興を目的とした同潤会が設立された。同会は初年度に罹災者用の仮住宅2160戸と普通住宅3420戸を建設し、震災復興にとどまらず新しい都市生活への意識改革、住まい方の提案まで行い、わが国の住宅史上大きな意義を持つ存在になっていった。当初は池田宏、内田祥三、佐野利器を中心スタッフとして、アパートをはじめ、罹災者用応急仮設住宅、木造普通住宅、職工用住宅の建設など数々の事業を行ったが、1934年には資材の欠乏から建築活動の休止を余儀なくされた。同潤会アパートは東京と横浜で計16箇所に造られた。そして1982年老朽化のため平沼町アパートが解体され、その後も次々と解体されている。

昭和30年代には同潤会アパートの流れを組んだ石神井公園団地や桜上水団地が造られるなど、高度経済成長期の日本の都市生活に与えた功績は大きい。

⑨臨海部開発(⇒1936)

7つ目の副都心であるお台場もオープン以来次々と新しい施設が生まれ発展している。かつて大砲の御台場であったこの地の開発の歴史は第二次世界大戦以前に遡る。

1940年に皇紀2600年祭が開催された。この国家的イベントを盛大に行うため、1930年代には東京オリンピック(1938年開催予定)や東京万博が計画されていた。オリンピック会場予定地は原宿や代々木、博覧会会場の候補地は豊洲、東雲、有明をメイン会場とするものであった。また「月島市庁舎建設計画」として現在の晴海1丁目に5万坪の市庁舎予定地が用意されていた。しかしながら日中戦争の影響で1938年にオリンピックの開催が中止され、お台場での水上万国博覧会も幻となり、結局実現したのは東洋最大の可動橋「勝鬨橋」のみという状況であった。1964年には悲願であった東京オリンピック開催により都心西側地区が開発され、1980年代には都心東側地区の開発を目指し、臨海副都心における「テレポート構想」ならびに「世界都市博覧会」が鈴木知事

のもとで計画された。オリンピックとならびもうひとつの悲願であったこの「世界都市博覧会」は結局不況のために中止されたが、1995年のビッグサイトとゆりかもめの完成を皮切りに臨海副都心はオープンし、現在では「お台場」として賑わいを見せている。

⑩東京郊外にある大公園と環状緑地帯構想(⇒1938)

1924年にアムステルダムで開かれた国際都市計画会議で都市の周辺にグリーンベルトをとという考え方が提唱された。その影響もあり、日本では1938年に東京の区部周辺に幅2キロほどの緑地帯を置き、公園・ゴルフ場・市民農園・学校園にするという環状緑地帯計画が立てられた。その結果、1940年の皇紀2600年祭記念事業のひとつとして、砧・神代・小金井・舎人・水元・篠崎に合計637ヘクタールもの大緑地を造成することで事業予算が可決され、内務省も国庫補助をすることとなった。そして用地買収も始まった。

しかし、1945年3月の東京大空襲により一面の焼野原となってしまうと、同月には復興計画が検討され、河川沿い、道路沿いの敷地、旧軍用地などの国有地を対象として、都心を緑地帯(防空地帯)で包み、公園と都心に向かって楔状に配置する計画が立案された。

戦争が終結し、占領軍による統治時代が始まると、農地改革も実施され、公園にすべく買収済みだった土地までその対象となり、62%を民有地に返すという措置がとられた。戦後の財政難や地方優先型の復興計画が主流だったという理由の他に、「敗戦国にふさわしくない」と進駐軍に評価されたこともひとつの要因として挙げられている。こうして東京のグリーンベルトの構想はなくなったのである。実際に実施されたのは新宿、渋谷などの駅前当初予定の6%の区画整理などでしかなかった。現在、東京の郊外にある大きな公園はその計画の遺産である。

⑪アメ横(⇒1940年代)

太平洋戦争以前はションベン横丁と呼ばれる下

町の住宅街であったこの地域は、戦時中にガード下の変電所を守るために強制疎開され空地となっていた。戦後は闇市に都合のよい場所となり、そこで、ある店が飴を売り始めたことにより賑わっていった。当時は甘いモノが手に入りづらかったのである。また1950年の朝鮮戦争時にはこの地域にアメリカ物資が出回った。この両方の意味合いから「アメ横」の名がついた。

⑫各種河川と堀 (⇒1947)

かつての江戸には江戸城を中心とした水辺のネットワークがあり、水上交通は江戸の重要な動脈となっていた。しかしその動脈は戦後に埋め立てられることになってしまった。終戦直後、焼野原となった東京の都市建築復興が開始されたが、ネックになっていたのが瓦礫の処理であった。国家補助の支援が1947年に打ち切られてしまったため5トン積みトラック約16万台分にのぼる瓦礫が残ってしまった。都では莫大な費用を必要とする瓦礫の撤去作業を安く抑えるため、1948年から各種河川と堀を瓦礫の捨て場として埋め立て、その上を宅地にして処理したのである。

そして、三十間堀川（中央区東銀座周辺）、東堀留川（中央区日本橋堀留町）、新川（中央区新川）、真田堀（新宿区四谷上智大学グラウンド）、浜町堀（中央区日本橋浜町）、六間堀川（江東区仙台東堀川周辺）、鍛冶橋下流外濠（中央区東京駅南側）などが埋め立てられてしまった。

⑬首都高速 (⇒1956)

1956年「東京都市計画の道路の現状と将来」という道路白書が作成され、都市高速道路の建設が訴えられたが、予算が認められず計画は進まなかった。しかし1964年のオリンピック開催を控え、急遽1959年に首都高速建設の工事が始まった。その際に用地買収を少なくするために広い道路の真ん中、川、堀の上や底などが利用された。現在の東京都心部の景観はこのような突貫工事から生まれた。

⑭大江戸線 (⇒1972)

第二山手線として都内を「6」の字状に走る大江戸線が2000年に開通した。この大江戸線の計画は約30年前の1972年に既に存在していたが、石油危機により財政が悪化し、その計画は一時中断していた。その後小型の車両を採用することにより、時間的、空間的、経済的負担が緩和され、ようやく実現することとなった。

1.5 おわりに

一年後の2005年は、兵庫県南部地震から10年になる。10年前に発生した地震であれば多くの人にとって、それほど記憶が遠のいているわけではなかろう。ここ10年間の復興過程を肌で感じている人も少なくない。しかし80年前となると話が違う。人の人生を80年とすれば、ほとんどの人にとって関東大地震の記憶はないであろう。しかしこの80年間にたどってきた都市形成の過程は確かな現実である。つまりは、我々が日常的に体験している現代の東京も過去の事実が重層して具体化しているのである。関東大地震から80年ということで、不十分ながら東京を対象として時代を遡ってみた。当たり前のことだが、70年後には兵庫県南部地震の被災地域も80年間の歴史が刻まれている。都市という大きな対象を見ていくには数十年という視点も必要である。

個人的な感想となってしまうが、この企画を契機として、東京の未来と現在と過去を改めて見つめ直す視点ができたように思う。新たな視点で都市の防災復興研究が社会に還元できるよう今後も努めていきたい。

参 考 文 献

本稿を執筆するにあたり、下記の文献を参考に（あるいは引用）させていただきました。

『見えがくれする都市』 榎 文彦他（鹿島出版会）

『この一冊で東京の地理がわかる！』 正井泰夫監修（三笠書房）

『東京都市計画物語』 越沢 明（日本経済評論社）

『関東大震災 大東京圏の揺れを知る』 武村雅之（鹿島出版会）

『日本史年表・地図』 児玉幸多編（吉川弘文館）

『東京人 No.184 特集「同潤会アパート」78年の軌

- 跡』(都市出版)
『東京人 No.181 特集 2003年東京計画地図』(都市出版)
『STUDIO VOICE Vol.329 特集 東京デザイン会議 2003』(インファス)
『県史 13 東京都の歴史』竹内 誠ほか(山川出版社)
『建築大辞典』(彰国社)
『標準学習カラー百科 5 日本の歴史』(学研)
『21世紀子ども百科 歴史館 増補版』(小学館)
『21世紀子ども地図館』(小学館)
『歴史・災害・人間 上〈災害史・原論〉編』北原糸子・寺田匡宏編(歴史民族博物館振興会)
『新訂 現代日本経済史年表』矢部洋三ほか編著(日本経済評論社)
図解 東京都を読む辞典』市川宏雄編著(東洋経済)
『建築文化 No.588 特集 世界の都市プロジェクト 1960 - 1995』(彰国社)
『六本木ヒルズオープニング展覧会 世界都市展』(森ビル)

2. 1923年関東地震における隅田川橋梁群の被害の概要

庄司 学*

2.1 はじめに

1923年9月1日の正午前の11時58分、マグニチュードM=7.9の関東地震が発生した^{1), 2)}。これは、フィリピン海プレートが相模トラフを境に南関東地方から太平洋側に向かって潜り込むプレート境界運動によって引き起こされた結果である。歴史的に関東周辺は元禄16年(1703年)、安政2年(1855年)などの大震災を経験しており、これらの惨禍が再び繰り返されたことになる。ここで記載した関東地震の発現時刻およびマグニチュードは宇津¹⁾および宇佐美²⁾が示した数値に拠っている。関東地震のマグニチュードに関しては、文献3)および文献4)において出所や数値の精度が論考されているので、詳しくはこれらを参考にしていただければと思う。また、関東地震の震源断層モデルや地震動の評価に関しては、KANAMORI⁵⁾の研究を端緒として、ここ30年程度の間イベントの時空間的な分布や変動が明

らかになりつつあり、関東地方の地下構造に関する研究成果とリンクして、一定の精度で地震動評価を行うことが可能となってきた(例えば、6)~8)。

関東地震において特記すべき点は、改めて言うまでもなく、被害の甚大さである。被害報告書としては、文部省に設置されていた震災予防調査会による報告書⁹⁾と、地震発生翌日に内務省を中心として組織された臨時震災救護事務局による報告書¹⁰⁾の2つが特に有名であり、関東地震による被害の全貌はこれらの報告書に基づいて論じられる場合がほとんどである。震災予防調査会報告によれば、東京府の1府と神奈川、千葉、埼玉、山梨、静岡、茨城、長野、栃木、群馬の9県における死者、負傷者、行方不明者はそれぞれ99,331人、103,733人、43,476人にのぼり、家屋の全潰、半潰、焼失、流失はそれぞれ128,266、126,233、447,128、868にも達する。参考までに、関東地震における家屋の被害率、地形の隆起および沈降による変化、初動の方向、海岸部における津波の波高などの様子を図2-1に示す¹¹⁾。なお、上述した死者、負傷者、行方不明者の数や家屋被害に関する数値の精度に関しては武村、諸井ら^{4), 12)~15)}によって精査され、問題点が指摘されているが、ここでは被害規模の概略を示すという観点から具体例として震災予防調査会報告の数値を用いた。

このような人的・物的被害の要因は木造建築物、特に木造住宅の被害によるものである。木造住宅の被害データとしては震災予防調査会^{16), 17)}、臨時震災救護事務局¹⁰⁾、地質調査所^{18), 19)}による調査データが主なものであるが、これらのデータに対する再評価が同様に武村、諸井ら^{20)~22)}によって行われており、木造建築物の被害の全貌が明らかになりつつある。このため、木造建築物の被害に関してはこれらの文献を参照していただくこととして、ここでは、河川、道路、橋梁、鉄道、上下水道、通信などの社会基盤を対象として取り挙げ、特にこれらの中でも隅田川に架かる橋梁群の被害に着目し、これらの被害の概要と火災の関連について以下では論じることとする。

* 筑波大学機能工学系

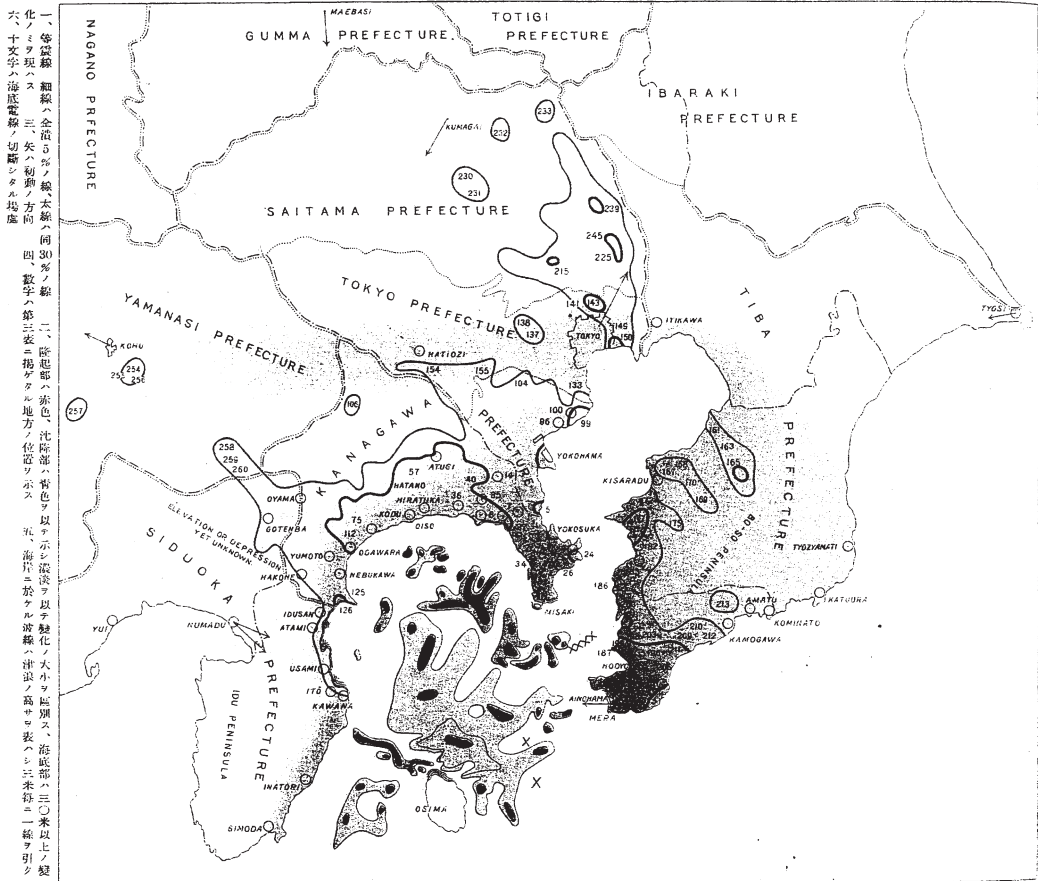


図 2-1 関東地震における被害の概要 (文献 11 より転載。原図はカラーで示されている。図中の左側に凡例が示されているが、判別し難いので、以下にまとめる。1. 細実線は家屋の全潰 5%, 太実線は全潰 30%を表す。2. 赤色は地面の隆起部, 青色は沈降部を表し, 濃淡がそれらの程度の変化を示す。海底部は 30 m 以上の変化のみを示す。3. 矢印は初動の方向を示す。4. 数字は別途文献 11) で示されている「第三表」の中の地方都市の識別番号を表している, ここでは意味をなさない。5. 海岸部における波線は津波の高さを示し, 3 m ごとに線が引かれている。6. ×印は海底電線の切断を示す。)

2.2 東京市内の道路および橋梁の被害の概要

震災予防調査会報告の第百号(丁)が「建築物以外ノ工作物篇」となっており, この中で河川, 道路, 橋梁, 港湾, 堰堤, 塔状構造物, 鉄道, 上下水道, 電信・電話などの社会基盤に関する被害が詳述されているが^{23)~29)}, ここでは特に東京市内^{註 1)}の橋梁および道路の被害についてまとめる。

中村清二は文献 30) の中で東京市内の橋梁の被害に関連して「交通不可能ニナツタ橋」の中で以下のように述べている。

「焼失区域内ニ於テ多數ノ橋ガ交通不可能トナツテソレガ爲メニ市民ノ蒙ツタ迷惑ハ莫大ナモノデアツタ, 避難者ハ逃路ヲ失ヒ消防隊ハ活動ヲ阻止セラレテ人民ノ財産モ生命モ之ガ爲メニ危クセラレタ。」

図 2-2 は 9 月 1 日から翌日までの焼失地域の変化を示した結果である(全く同様の趣旨の図が文献 4) に掲載されているが, 論理の展開上必要なのでここに示した³⁰⁾。東京市の中心を流れている川が隅田川であるが, 時間の経過とともに隅田

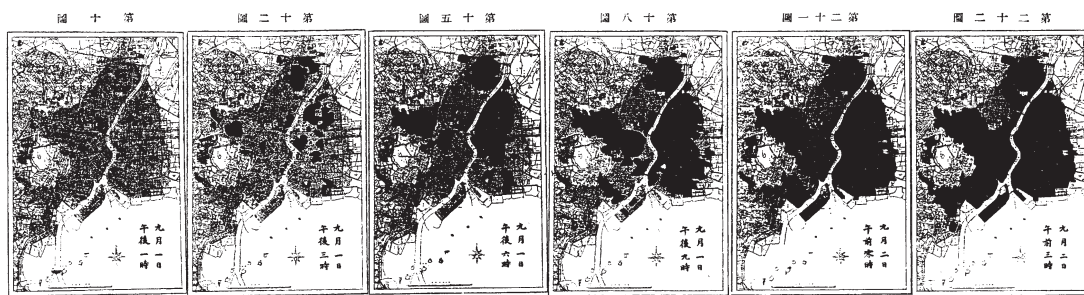


図 2-2 9月1日から翌日までの焼失地域の変化(文献 30 より転載。なお、黒色が焼失地域を表しており、左側から順番に9月1日午後1時,同午後3時,同午後6時,同午後9時,9月2日午前12時,同午前3時の状態の変化を示している。)

川を挟んで東側に位置する向島, 深川, および西側に位置する上野, 日本橋, 新橋を中心に, 火災が時間の経過とともに市全体に広がっていった様子がわかる。この結果, 市部の焼失面積は 22,475 方里^{註2} (10,485,936 坪^{註3}) に達し, 焼失面積は市全体の 44% に達している³¹⁾。これらの資料だけでも, 前述した中村の指摘が切迫性をもってこちらに強く訴えかけてくる。

東京市内の橋梁の被害をまとめると表 2-1 のようになる²³⁾。表 2-1 中の表現はすべて文献 23) によっているが, 震害とは火災以外による被害を示している。これによれば, 震害による被害は合計 18 橋であるのに対して, 火害による被害は合計 340 橋にも達している。震害の内訳を見てみると混凝土道の 4 橋の橋が全て被害を受けているが, これは鉄筋が入っていないために水平力に対する抵抗が低かったためである。また, 火害に関しては鐵造による橋の被害率が橋の数および被害面積のいずれの観点からも最も高い数値を示しているが, これは後述するように木材を混合して使用していたためである。

一方, 当時の道路舗装の形態は「瀝青混凝土道」, 「瀝青マカダム道」, 「舗木道」, 「舗石道」, 「煉瓦道」に分類されるが, 東京市内におけるこれらの火災による焼損率(火災区域内における総面積に対する焼損面積の比)を求めるとそれぞれ 21%, 46%, 23%, 23% となり, いずれの舗装形態においても 20% 以上の大きな被害が生じている。なお,

舗装道路の火災以外の被害としては合計 16 箇所の亀裂, 10 箇所の隆起, 1 箇所の陥没が生じている。

2.3 隅田川橋梁群の火災による被害

文献 23) に基づけば, 隅田川に架かっていた永代橋, 新大橋, 両国橋, 厩橋, 吾妻橋の 5 つの橋梁には不燃質材料と木材が混合して用いられていたようであり, このため, いずれも半耐火構造に分類されるが, これらの混合の割合および方法に相違があったため, 火害の程度には大きな相違が生じた。

両国橋は 5 つの橋梁の中でも耐火性の高い橋梁であった(写真 2-1 (a) 参照)。橋台は混凝土造で, 橋台の表面は煉瓦張りであり, 橋脚は煉瓦製の井筒構造であった。井筒の中には粗混凝土が充填されていた。また, 上部構造は 3 連の鋼製プラット構造であり, 主桁は車道と歩道の境界部に位置し, 主桁間には横桁が取り付けられるとともに, これらに縦桁が取り付けられ, このような桁がバックル鉄製の床版を支えていた。床版には混凝土が敷かれて舗装をなしていた。しかし, 歩道部に関しては経済性の観点から縦桁の材質として木材が用いられていたために, 隅田川の水面に面している桁の下側は木材が露出することとなり, 上流側の歩道は橋の下の船の火災により引火して大半が焼失した。しかし, 木材の使用量が少なかったために, 主桁および横桁にはほとんど影響が及ばず, 橋の強度としては震災前の状態を保持することが

表 2-1 東京市における橋梁被害の概要（文献 23 より転載）

橋梁材料	木造	鐵造	石造	混凝土道	鐵筋混凝土道	合計
橋数	420	60	144	4	47	675
路面積（坪）	14089	10127	1515	395	2057	28183
震害						
橋数	6	6	2	4	0	18
同被害率	1.4	10.0	1.4	100.0	0	2.7
面積（坪）	520	1140	151	393	0	2204
同被害率	3.7	11.3	10.0	100.0	0	7.8
火害						
橋数	276	49	5	0	10	340
同被害率	65.7	81.7	3.5	0	21.3	50.4
面積（坪）	7600	8016	588	0	1194	17394
同被害率	54.0	79.0	37.8	0	58.0	61.8

できた。

一方、吾妻橋、厩橋、永代橋は両国橋と比較して多量に木材を使用していたために、火災により致命的な被害が生じた（写真 2-1 (b)～(d) 参照）。これらの橋梁の橋台および橋脚の構造は両国橋と同様であり、主桁と横桁に関しては鋼材を使用していた。しかし、縦桁には車道および歩道においてともに木材が使用され、これらの上に檜の敷板が張られ、車道においては木塊が釘着された形式となっていた。このため、橋床の材質の大部分が木材で、これらの上面、下面がともに露出する結果となり、上面は橋梁近隣家屋からの飛び火や橋の上に一時的に避難させていた家財の燃焼により、また、下面は船の火災などにより引火し、いずれの橋梁においても橋床は全焼するとともに、主桁や横桁は長時間高熱に晒されたため、著しく屈曲し、甚大な被害を被った。

新大橋に関しては、橋台や橋脚が他の橋梁と同様の構造であり、その上、上部構造に全て鋼材や混凝土などの耐火材料が用いられていたため、火災による被害を完全に免れることができた。

2.4 隅田川橋梁群の被害と死亡者の関連

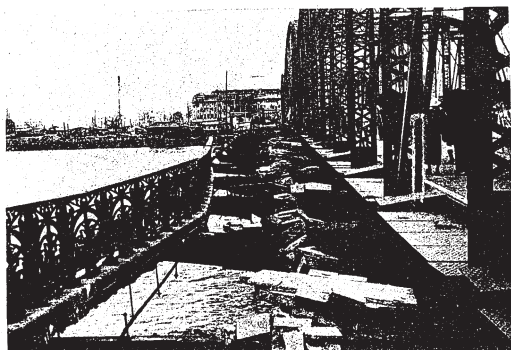
図 2-3 には中村清二が示した火災動態地図を示す³⁰⁾。これには、焼失地域、火元の位置、飛び火の方向と位置、火元あるいは飛び火位置から焼け終わりまでの火流の発散の様子がそれぞれ示され

ている。このような分析を通じて、中村は大道路、河川、鉄道路線等が防火線としての機能がある程度果たしたことを認めている。しかし、中村は一方で、道路や線路上に置かれた家財や荷物等が火災の媒体となり、防火線としての役割を果たせなかった道路が多数存在した事実を指摘している。この事実にまさに当てはまる橋梁が隅田川の橋梁群であったわけである。

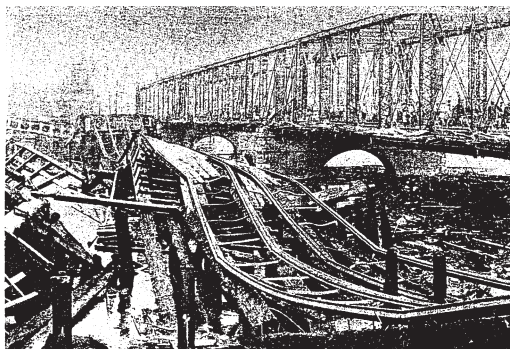
隅田川の橋梁の立場に立つと、防火線としての機能と同時に避難路としての機能が求められていた。前章で詳述したとおり、これらの橋梁は半耐火構造であったため、図 2-3 に示す猛烈な火流にあっては防火線の機能をほとんど果たし得なかった。必然的に避難路としての機能を果たせず、死亡者の数を助長してしまう結果となった。

吾妻橋、厩橋、永代橋の周辺近隣における死亡者の死因調書をまとめると表 2-2 のようになる。これは竹内六蔵が示した「震火災ニ因ル死者調」³²⁾ から一部を抜粋したものである。これによれば、いずれの橋梁に関しても溺死者の数が非常に多いことがわかる。溺死者のほとんどは、火災により河川、運河、地沼、船舶に逃れたが、以下のような様々な状況により溺死したものである。

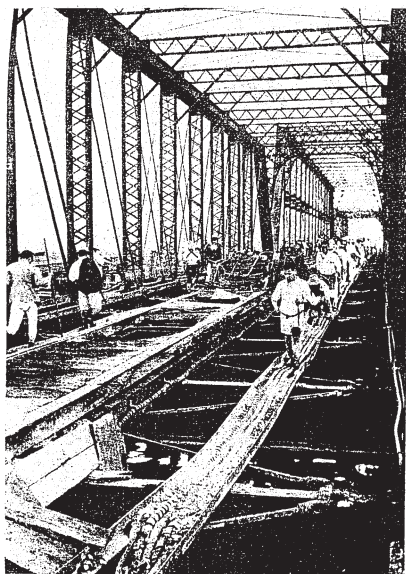
- 船舶に逃れたが、あぶれ出た。
- 荷物が多く、船舶が動かず、これに飛び火したため、川に飛び込んだ。
- 橋に逃げるも、群集をなしていたため、あぶれ



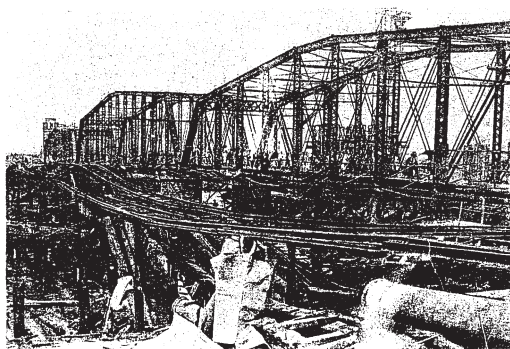
(a) 両国橋の被害



(b) 吾妻橋の被害



(c) 厩橋の被害



(d) 永代橋の被害

写真 2-1 隅田川橋梁群の被害 (文献 23 より転載)

出て、橋の外に押し出された。

- 橋に逃げるも家財を担っていたため、これらに飛び火するとともに、橋が焼失した。

このような分析を通じて、竹内は「三 死因ノ別」の中で次のように結論付けている。

「彼ノ本所、深川兩區民ノ樞要ナル避難路タル隅田川五大橋ノ如キ、焼残ツタモノハ兩國及新大橋ノ兩橋ニ過ギナカッタノdeal、本所、深川ニ於テ最多クノ死者ヲ出シタノモ是等ガ其ノ大ナル

原因ノ一デアラウ。」

凄まじい光景であったのではなかろうか。写真 2-2 は吾妻橋際の被害の状況である³³⁾。相当数の死体が見て取れる。灼熱の地獄のなかで逃げ惑いながら、川や橋に辿りつき、最後は溺死するという、あまりに想像を絶する状況であった。

このような甚大な被害をうけた隅田川の橋梁群は、現在では東京下町の美しい風景のひとつとなっている。内閣復興局と東京市の震災復興事業の一

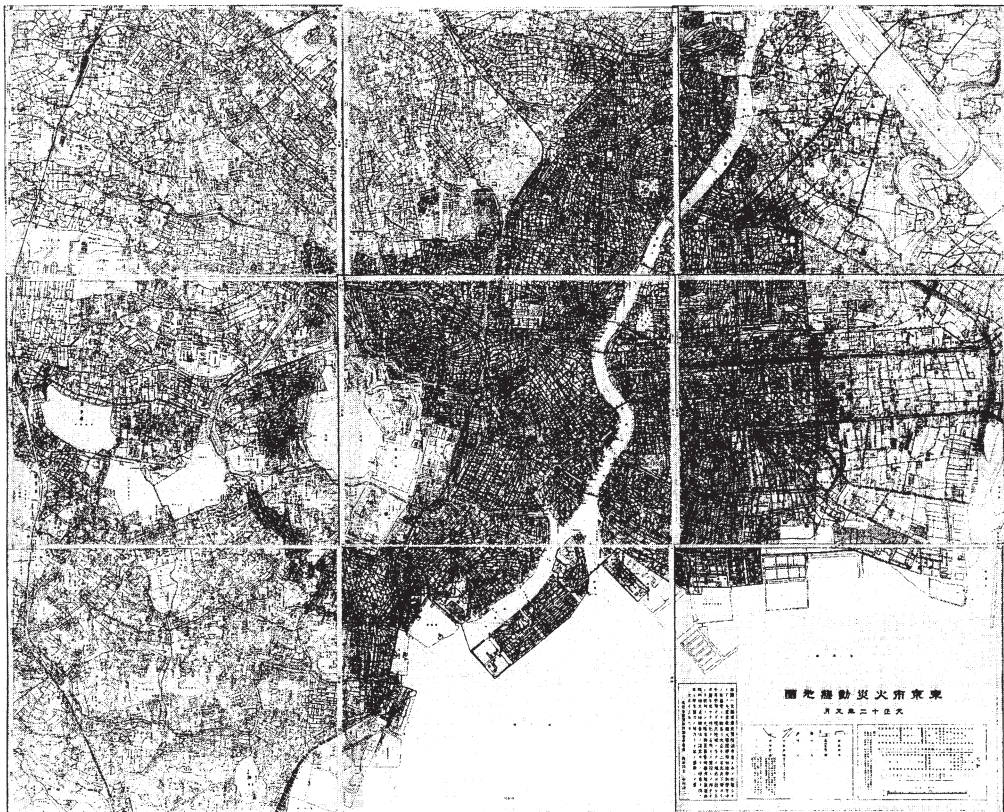


図 2-3 東京市内の火災動態図（文献 30 に示されている地図を 1 つの図にまとめた。原図はカラーで示されている。）

環で見事に蘇ったのである。特に、相生橋、永代橋、清洲橋、蔵前橋、駒形橋、言問橋の 6 つの橋梁は入念に設計され、当時の最新の橋梁技術がおしみなく投入された。これらの詳しい経緯は高橋³⁴⁾や中井³⁵⁾の著述を参考にしていただければと思う。隅田川に架かる橋梁の美しさや技術レベルの高さを否定するつもりは毛頭ないが、このような現在にいたる経緯はやはり心に刻んでおく必要がある。

2.5 あとがきにかえて

本特集の企画・編集者でいらっしやる村尾修先生より本稿の依頼をいただく直前に武村雅之著「関東大震災」⁴⁾を読んだ。武村氏がここ 10 年程度関東地震に関連して精力的に研究を進めておら

れていることは学术论文などを通じて知ってはいたが、氏の著述をまじめに読んだのは、情けない話ではあるが、この本が初めてである。「まじめに読んだ」というよりも、むしろ非常に強く惹きつけられ、あっという間に読み終わってしまった。その一部分を長くはなるが敢えて以下に引用させていただきます。

「地震現象やそれに伴う災害はまさに、具体的な自然現象であり、社会現象である。したがって、身近に起こったことを中心に体験も交えて理解しなければ、理解は深まらない。つまり、「グローバル」な一般原則を理解するだけではだめで、身の回りの「ローカル」なことにこそ、理解を深める鍵が隠されているのである。

(中略)

表 2-2 永代橋, 両国橋, 厩橋, 吾妻橋の周辺近隣における死亡者の死因と数³²⁾

場所	死因	性別ごとの死者数			合計
		男	女	不詳	
永代橋際	焼死	16	3	0	19
永代橋下	溺死	24	0	0	24
大川筋永代橋付近	溺死	296	328	0	626
大川筋両国橋付近	溺死	31	45	0	76
大川筋厩橋付近	溺死	15	19	8	42
大川筋吾妻橋際	溺死	10	13	0	23
大川筋吾妻橋付近	溺死, 船火事	82	102	0	184



写真 2-2 吾妻橋下の惨状 (文献 33 より転載)

要は、地震と上手につきあうためには、過去の震災経験に学びながら、自分の身のまわりのこととして地震を実感することが第一であると思ふ。そこから自分独自の震災対策が生まれてくるだろう。もちろん国や地方自治体がすすめる震災対策はそれらの基盤をなすものとして重要であるが、それだけでは十分ではない。本書で私は、関東地震にまつわる様々なことがらを述べた。関東地震という日本の歴史上最大の自然災害を引き起こしたイベントの全体から見ればほんの一部にしすぎないが、読者の心にどこか一カ所でもひっ

かかるころがあれば、それが震災対策の第一歩になったかもしれない。」

以前、母方の祖母の自宅で軽微な地震に遭遇したことがある。震度 2 から 3 程度の地震であったと思う。祖母の瞬時の表情の変化と対応行動 (具体的には庭への扉を咄嗟に開け、トイレに駆け込んだ) はうっすらと覚えている。祖母は人生のほとんどを東京で過ごし、そのときは東京都小金井市に住んでいたが、幼少期は青山で過ごしたと聞いている。1993 年に 84 歳の生涯を閉じたので、関東大震災の際には 14 歳であったことになる。

今では中学生の年齢にあたるわけだから、祖母もやはり凄まじい体験をしたのではないかと、ようやく実感を持てるようになった。武村氏の詳細震度分布を見ながら、青山の具体的にはどの辺りだったのであろうか？どのように避難したのだろうか？隅田川周辺の惨状を目の当たりにしたのだろうか？などの様々な思いが浮かんできた。今から思えば、「体験談」をしっかりと聞いておかなければならなかったなあとつくづく後悔している。

註1) 当時の東京市は麹町区、神田区、日本橋区、京橋区、芝区、麻布区、赤坂区、四谷区、牛込区、小石川区、本郷区、下谷区、浅草区、本所区、深川区の合計15区よりなっていた。

註2) 1里=3.927 km

註3) 1坪=3.3058 m²

参 考 文 献

- 1) 宇津徳治：日本付近のM 6.0以上の地震および被害地震の表：1885年～1980年，地震研究所彙報，Vol. 57, pp. 401-463, 1982.
- 2) 宇佐美龍夫：最新版日本被害地震総覧 [416]-2001, 東京大学出版会, 2003.4.
- 3) 武村雅之，池浦友則，野澤 貴：関東地震のマグニチュード，地震，第2輯，第52巻，第4号，pp. 425-439, 2000.
- 4) 武村雅之：関東大震災，鹿島出版会，2003.5.
- 5) KANAMORI, H.: Faulting of the great Kanto earthquake of 1923 as revealed by seismological data, Bulletin of the Earthquake Research Institute, Vol. 49, pp.13-18, 1971.
- 6) 川瀬 博：特集 巨大地震を前にして 強震動予測，建築雑誌，Vol. 118, No.1503, 2003.3.
- 7) SATO, T., R.W.GRAVES, P.G.SOMERVILLE and S. KATAOKA: Estimation of regional and local strong motions during the great 1923 Kanto, Japan, earthquake (Ms=8.2). Part 2: Forward simulation of seismograms using variable-slip rupture models and estimation of near-fault long period ground motions, Bulletin of the Seismological Society of America, Vol.88, pp.206-227, 1998.
- 8) 武村雅之，野澤 貴，池浦友則：地震動のやや長周期成分からみた1923年関東地震の震源特性 その3 仙台向山観象所および山形測候所での観測記録を用いた断層モデルの改良，地震，第2輯，第52巻，第2号，pp. 317-333, 1999.
- 9) 震災豫防調査会：震災豫防調査会報告 第百号 (甲) (乙) (丙) (丁) (戊)，岩波書店出版，1925.3.
- 10) 内務省社会局編：大正震災志 上下，1926.2.
- 11) 今村明恒：関東大地震調査報告，震災豫防調査会報告，第百号 (甲)，岩波書店出版，1925.3.
- 12) 武村雅之，諸井孝文：1923年関東地震の地域被害資料総覧，第2輯，第53巻，第3号，pp. 285-302, 2001.
- 13) 諸井孝文，武村雅之：関東地震 (1923年9月1日) による木造住家被害データの整理と震度分布の推定，日本地震工学会論文集，第2巻，第3号，pp.35-71, 2002.
- 14) 諸井孝文，武村雅之：1923年関東地震による被害要因別の死者発生数，第11回日本地震工学シンポジウム，pp. 2253-2258, 2002.
- 15) 武村雅之：1923年関東地震による東京都中心部 (旧15区内) の詳細震度分布と表層地盤特性，日本地震工学会論文集，第3巻，第1号，pp. 1-35, 2003.
- 16) 松澤武雄：木造建築物ニ依ル震害分布調査報告，震災豫防調査会報告，第百号 (甲)，岩波書店出版，1925.3.
- 17) 北澤五郎：木造被害調査報告，震災豫防調査会報告，第百号 (丙)，岩波書店出版，1925.3.
- 18) 地質調査所：関東地震調査報告第一，地質調査所特別報告，No. 1, 1925.
- 19) 地質調査所：関東地震調査報告第二，地質調査所特別報告，No. 2, 1925.
- 20) 諸井孝文，武村雅之：1923年関東地震に対する東京市での被害データの相互比較と地震動強さ，日本建築学会構造系論文集，第540号，pp.65-72, 2001.2.
- 21) 武村雅之，諸井孝文：地質調査所データに基づく1923年関東地震の詳細震度分布 その1. 千葉県，日本地震工学会論文集，第1巻，第1号，pp.1-36, 2001.
- 22) 武村雅之，諸井孝文：地質調査所データに基づく1923年関東地震の詳細震度分布 その2. 埼玉県，日本地震工学会論文集，第2巻，第2号，pp.55-73, 2002.
- 23) 物部長穂：土木工事震害調査報告，震災豫防調査会報告，第百号 (丁)，岩波書店出版，1925.3.
- 24) 物部長穂：煙突並ニ塔状構造物震害調査報告，震災豫防調査会報告，第百号 (丁)，岩波書店出版，

- 1925.3.
- 25) 物部長穂：横濱市内道路橋震害調査報告，震災豫防調査會報告，第百號（丁），岩波書店出版，1925.3.
- 26) 那波光雄：國有鐵道震害調査報告，震災豫防調査會報告，第百號（丁），岩波書店出版，1925.3.
- 27) 小川織三：東京市上水道震害調査報告，震災豫防調査會報告，第百號（丁），岩波書店出版，1925.3.
- 28) 竹中二郎：工場ノ震害ニ就テ，震災豫防調査會報告，第百號（丁），岩波書店出版，1925.3.
- 29) 澁澤元治：震災ニ因ル電氣工作物ノ被害状況，震災豫防調査會報告，第百號（丁），岩波書店出版，1925.3.
- 30) 中村清二：大地震ニヨル東京火災調査報告，震災豫防調査會報告，第百號（戊），岩波書店出版，1925.3.
- 31) 緒方惟一：關東大地震ニ因レル東京大火災，震災豫防調査會報告，第百號（戊），岩波書店出版，1925.3.
- 32) 竹内六藏：大正十二年九月大震災火災ニ因ル死傷者調査報告，震災豫防調査會報告，第百號（戊），岩波書店出版，1925.3.
- 33) 今村明恒：關東大地震ニ因レル各地方火災，震災豫防調査會報告，第百號（戊），岩波書店出版，1925.3.
- 34) 高橋 裕：現代日本土木史，彰国社，1990.
- 35) 中井 祐：隅田川に架けられた帝都復興の夢，土木学会誌，Vol.86，2001.2.

3. 日本列島崩壊と再生のビジョン

かわぐちかいじ*・村尾 修**

「沈黙の艦隊」，「ジパング」，「イーグル」などコミック界で数々の話題作を創造してきたかわぐちかいじ氏。2002年夏以降は，大地震による日本列島崩壊後の日本を描いた「太陽の黙示録^{註1)}」をビッグコミック誌（小学館）に連載している。その「太陽の黙示録」という話題作を描きはじめた経緯，氏の作品に共通して見られる日本という国家，日本人という民族性，危機管理に対する意識，我々都市防災の専門家に期待することなどについてお話をうかがった。



図 3-1 ©かわぐちかいじ『太陽の黙示録』（小学館ビッグコミック連載中）

村尾：私はかわぐちかいじ先生の大ファンで，これまでもいろいろな作品を読ませていただいています。昨年から「太陽の黙示録」という物語がビッグコミック誌で始まり，巨大災害が日本列島を襲った後の日本はどうなっていくのか，という物語を描かれているのですが，本日はこの物語の構想がどこからきたのか，この物語に込められた日本に対するメッセージ，そして危機管理という視点から我々防災の専門家に対する要望などについて，お聞きしたいと思います。よろしくお願ひします。

かわぐち：よろしく

3.1 かわぐち作品のテーマとメッセージ

- 結局，被災後のリアリティを追及していきたいんです

村尾：まずはかわぐち先生のこれまでの作品につ

* 漫画家

** 筑波大学社会工学系



写真 3-1 作品について熱く語ってくださったかわぐち氏

いて、お聞かせください。私が初めてかわぐち先生の作品に接したのは、ビッグコミックに連載された「ガマ」です。ここではドラマあるいは映画のディレクターが役者に何者かを演じさせるという行為がテーマでした。それは人間がテーマだったと言うこともできるでしょうが、今思うと「表現する」という人間の行い自体であったかも知れません。また 80 年代後半から始まった「沈黙の艦隊」では世界の海を舞台にして、原子力潜水艦を切り札にして日本に真の独立国家を促す海江田四郎という主人公が登場します。1990 年から始まった「メドゥーサ」では、政治家の家で共に育ったひとりの男とひとりの女が、それぞれ政治家として、そしてテロリストとして日本を変えようとしていく物語でした。「メドゥーサ」の後に始まった「イーグル」では、一人の日系 3 世が、理想の世界を実現するために様々な困難を乗り越えてアメリカ大統領になっていくという物語です。「沈黙の艦隊」の後、2000 年から始まった「ジパング」ですが、今度は自衛隊が太平洋戦争中の日本にタイムスリップしてしまい、現代の最新技術をもって、戦後日本が歩んできた歴史とは異なる世界へと変えていこうとします。それぞれ大変興味深く読ませていただいておりますが、これらの物語に一貫したテーマがあるとすればそれはどのようなものでしょうか。

かわぐち：一貫したテーマですか。一貫は、多分していないと思うんですよ。だけど、作品ごとに類似したところはチョコチョコ出てきていると思うんですよ。「メドゥーサ」あたりから、政治など今の日本を取り巻く状況をメインに、大きな話になってきています。結局、個人の話を書こうとすると、どうしても周りの状況を書いていかないとリアルに描けない。周りの状況となると、主人公が関わっている環境、たとえば自衛隊の話なら、アメリカとか中国など、自衛隊を取り巻く状況を国ごとに書いていかないと、自衛隊の存在がリアルになっていかない。結局、現実感が欲しいんですよ。いつも個人の思惑だけでは成立しない世界を対象としてドラマを作るから、周りを描いていかないといけないんですね。連載を開始する時も、主人公をとりまく環境というのはそれほど大きくないんですよ。個人がいて、その周りのささいな状況だけだったのが、どんどん、どんどん広がっていくんですよ。そして、どんどんいろんなテーマが追加されていく。そして、そのテーマに応じて、主人公の顔がどんどんどんどん変わっていく。そして結果的に、連載が長くなっていくのが多いんですけど（笑）。主人公と主人公を取り巻く世界を現実感を持って描きたいというのが僕のスタンスなんですね。どの作品についても、あまり架空な、いい加減な感じの状況にはしたくない、と思っているんです。リアルな世界で、主人公がどう生きていくかというのを描きたいんですね。そのリアリティを追求すると、どうしても、「ガマ」だったらテレビ界、テレビを支えているいろんな日本の芸能状況になってきますよね。もし、「メドゥーサ」だったら、学生運動から始まるんですが、「じゃあ、その学生運動って何だったんだろう」ってなるんです。学生運動が成立していたその時代背景をきちんとリアルに描いていきたいな、と。「沈黙の艦隊」だったら自衛隊ですよ。そして、自衛隊とアメリカの関係になっていく。今描いている「太陽の黙示録」だと、日本は大震災に遭う確率というのはかなり大きな確率ですよ。その時に、日本人はどう動くのか、という、その期待感と興味ですよ。そういうものを考えながら、被災後

のリアリティを追求していきたいんです。

- メッセージって結構、後から付くんですよ

村尾：そうしますと、最初から物語の展開がすべて見えているわけではないんですね。

かわぐち：そうです。勘ですな(笑)。

村尾：物語のリアリティを追求する中でいろいろな情報が入ってきて、そこでまた出発点の段階では見えなかった新しいテーマが生まれて、展開していくというわけですね。

かわぐち：そうです。新しい問題が出てくるんですよ。

村尾：それでは、先生自身も出発点のところでは見えなかったものが見えてくる楽しみというものもあるんじゃないですか。

かわぐち：そうですね。見えなかったものが見えてくるというか、主人公が動いていくにしたがって、いろんな問題が降りかかるんですよ。その問題を対応していくところにドラマを創りたいんですよ。すると主人公の苦労だったり、喜びだったり、悲しみだったり、怒りだったり、というのが出てくるじゃないですか。そこにドラマを創ろうとするんですよ。ひとつの問題をある程度クリアしたなと思ったら次の問題が出てくる。そして、螺旋形みたいに展開していくんですよ。

村尾：読者としては、次の展開はどうなんのかな、って楽しみにしますよね。先生自身も描きながら、新しい思いがけない発見があったりするのではないのでしょうか、同じ楽しみを共有するというか。

かわぐち：そうなんです。作品の出来のよし悪しはですね、そこで決まるんですよ。要するに、いろんな問題を、こうレンガを積み上げていくみたいに、積んでいける、作品の筋といいますか、そ

ういう筋を持ったものが良いんですよ。いろんな膨らませ方が出来る。で、主人公もいろんな関わりが出来る。しかし、そうじゃなくて、積み上げられない筋もあるんですよ。筋が悪いというんですかね、最初に目論んだことだけやって、それがある程度の収束感があって、それ以上は伸びない。主人公が、その世界からいろんなテーマを引き込めないんですよ。そういう物語は、展開しないまま終わっちゃうんですよ。

村尾：そうならない様に、最初の段階で、ある程度大きなフレームを考えて出発すると考えていいですか。

かわぐち：いや、それは、考えるというかね、勘というかね、やっぱり計算できないですね。転がって行って、だんだんわかってくるんですよ。あ、これはこういう問題も引き入れられる構図なんだな、と。例えばある構図に、A、B、Cという状況があれば、Aも引き込める、BもCも引き込めるとなったりします。Aを引き込んだときに、「あ、じゃ、これBもいけるんじゃないの。」ってというような感覚で、作業が進んでいくので、最初からA、B、Cなんてものはないんですよ。だから、そこは読者と一緒を楽しんでいるようなところがありますよね。

村尾：そうしますと、最初からメッセージがあるわけではなくて、むしろ逆で、何か作品を書き上げた時に振り返ってみて、「いろいろなことを考えてきたんだな」となって、そこで、「じゃ、次にこういうテーマでやっていこう」って。そういう風に新しいテーマが見つかったりするわけでしょうか。終わってから。

かわぐち：そうですね。あのね、メッセージって結構、後から付くんですよ。最初からメッセージを用意してっていいことはないんですよ。メッセージというのは、その主人公が生きて行って、生活して、それがドラマになっていく、そんな中にいろいろ込められていく、引き込んでいくんですよ。

メッセージをね。その主人公が引き込んでくるという形なんです。自分が最初から用意しているわけじゃない。だから最初、作品をどういうものにしていこうかなっていう時に、そのテーマそのものが既に消化されたテーマって感じじゃなくてね、なんとなくね、こういう感じが面白そうだなというね、漠然としたイメージ。

- 皆、障害があるわけじゃないですか

村尾：しかしですね、私自身、先生の作品をいろいろ読ませていただいているのですが、例えば、日本、日本という国家、日本人の民族性、人間の志の強さ、責任と義務、あるいは組織と個人、一人それぞれいろんな立場を持っていますから、その個人である自分と、組織の中の自分。何かその葛藤みたいなものが、どの作品の中にもあるような気がしたんですね。それが先生のテーマなのかなと、そして、そういうものが「太陽の黙示録」の中で、被災後の日本を舞台に描かれていくのかな、と思っていたのですが。

かわぐち：そうですね。その葛藤に劇性を盛り込みたいとは思っていますね、そこが劇だと思うので。どうしても、いろんなもの同士が衝突していくところに葛藤が出ますよね。その葛藤を膨らませたいなど。そこがドラマだという気持ちが強いので、その障害を真正面から受け止めようとすると、いろんな障害が出てくるんですよ。障害。実際皆、障害があるわけじゃないですか。そこをなんとなくやり過ごす時もあるれば、やり過ごせなくて、立ち向かわなきゃいけない状況もあるだろうしね。そういう、いろんな障害をリアルにやりたいんです。それは読者も共感するんじゃないかなと思うんですよ。

3.2 「太陽の黙示録」の構想とそこに描かれる震災後のビジョン

- リアルに震災の状況を提示していきたい



図 3-2 ©かわぐちかいじ『太陽の黙示録』 (小学館ビッグコミック連載中)

村尾：「沈黙の艦隊」を描かれてから7年ほど経った1996年に書かれたかわぐち先生のコメントを読みますと、「まだこれから描きたいテーマがたくさんあるんだ。」ということを書かれていました。今思うと、その頃描きたかったテーマというのは、日系アメリカ人がアメリカ大統領になっていく「イーグル」であったり、あるいは太平洋戦争を扱った「ジパング」だったのかな、と思うんですね。またこの1995年には阪神・淡路大震災も発生しています。この「太陽の黙示録」は震災をテーマにしているわけですから、何かその時のある体験があって、この頃に描きたかったというテーマのひとつとなったのかな、と思ったのですが実際はいかがですか。

かわぐち：いや、それは考えてなかったです。

村尾：そうですね。阪神・淡路大震災とこの「太陽の黙示録」との関係を知ると聞けるかと楽しみにして

いたのですが。

かわぐち：「沈黙の艦隊」が終わった時に、「いろいろ描きたいものがある」と言ったのは、実は一つの作品を描き終わって、なんかこう、尻つぼみになるというか、元気がなくなっちゃいけないんで、実はいっぱいあるんだよと、花火を上げたかっただけなんですよ（笑）。自分を景気付けたいなってね。基本的に「沈黙の艦隊」を描いている中頃から、太平洋戦争を描きたいなと思ったんですよ。自分が、そのYAMATOっていう、原子力潜水艦をアメリカのニューヨークの国連まで持って行くんだけど、その間にいろんな戦闘が、障害が起きるわけですよ。描きながらね、「あっ、自分は太平洋戦争に興味があるんじゃないかな」と思ったんですよ。あの物語は実は近未来のことで、原子力潜水艦を日本が持つっていう状況ですよ。近未来の戦闘のはずなんですけど、実は太平洋戦争って感じて描いていたんですよ。太平洋戦争に興味があるんだけど、その太平洋戦争をじゃあどう描けば良いかなって思いながら、そこがね、わかんないまま、「沈黙の艦隊」が終わったんですよ。でも、「沈黙の艦隊」を連載していく中でスタッフの戦闘を描くスキルが出来上がったんですよ。それまでは、戦闘を描くのがなかなか出来なくて。「沈黙の艦隊」で良かったのは、その戦争、戦闘をリアルに描けるようになったことです。しかも週刊誌にですよ、週刊誌で戦闘をリアルに描いていけるスキル、そういう技術とパワーがスタッフに付いたんですよ。「あっ、これで、太平洋戦争が描いていけるかな」と。それで、「沈黙の艦隊」が終わったときは、その辺のことがずっと頭にあって。だけど、その太平洋戦争をどういう形で処理していくか、というのが実はまだわからなかったんです。いろいろ考えていくうちに、今の戦争を知らない読者も引き込んでいける同世代の視線で物語をつくっていくことを考えたんです。同世代の日本人の目を持った自衛官がタイムスリップするというね。タイムスリップするという設定は、自分なりに安易だなと思ったんだけど（笑）。でも、しょうがないな、それしか手がないだろう、ってね。

まあ、安易だろうが何だろうが、描きたいのは太平洋戦争であると。テーマは、今の日本の状況で育った自衛官たちが戦時中に投げ込まれた時の葛藤とか交流ですよ。その時代にタイムスリップした現代の自衛隊と最新技術はどうなるんだろう、太平洋戦争は何だったんだろう、というのが描きたいわけだから、まあタイムスリップは目を瞑ってもらって、こっちが描きたいんだと押し切ってるんですけどね・・・（笑）。そうして「ジパング」が生まれたんです。

村尾：では、「太陽の黙示録」の発想はどこから来たのですか。

かわぐち：言っちゃっていいのかな（笑）。地震を描きたいというのが1つあって。地震のパニック、壊れていく、津波が来る、火にまかれるという地震に伴うパニックを、リアルにね、画で見せてね、その中に実際読者もひきこんでいきたいな、と思ったんです。それはたぶん読者も、「あまり遠くない未来で経験するだろう」ということで興味を持ってくれるんじゃないかな、ってね。まずそれが一つです。リアルに、リアルに震災の状況を提示していきたい、そこにある空気まで感じさせてリアルに読者が読めるように。そして、自分もその中で楽しみたいというのが一つ。あと一つのきっかけが韓国映画なんですよ。ちょうど「太陽の黙示録」が始まる前に、ハリウッドスタイルを完璧に取り入れることができた韓国の映画をね、見たんですよ。例えば「シュリ」だとか、いろいろ。すごく元気があって、面白いなあと。で、それらのテーマとして、南北分断された民族の悲劇なりをその中で描いているわけですよ。「シュリ」が一番わかりやすいと思うんですが。じゃあ、日本が南北に分断されたとしたら、どうなるんだろう、その韓国の板門店の38度線のところで分かれた民族とは違う状況で、違う分断のされ方があるのではないかと。ただ、日本ではそういう経験がないわけですよ。しかし、ドイツと韓国はそういう経験を戦後にしてきたわけですよ。そこに、非常にドラマ性を感じるわけですよ。そうなっ

た場合、日本人はどうするだろう、自分たちはどうするだろう、そしてどう対処していくんだろう、というのに興味がわいたんですね。地震のこと、地震時のパニック、それによって分断されていってしまう日本民族、しかも、日本が滅びていくかもしれないという恐怖感もあって、そういう時になって、日本人はどう動かなという、そういうことへの興味ですね。

村尾：私ははっきり、兵庫県南部地震を日本が経験して、そこからこういうテーマを描きたいのかな、描きたいと思われたのではないのかなと思ってたんですけど。

かわぐち：いや、韓国映画のインパクトが強かったんですよ（笑）。

- 主人公をどう動かすかっていうのが苦勞なんですよ

村尾：私は地震災害とか都市防災を専門に研究しているんですが、以前、兵庫県南部地震の直後に、ある大学の教授が「日本に本当に大地震が、東京に大地震が起きたときにどうなるかというものを、そろそろ誰かが描かなきゃいけないんだ」って、強くおっしゃっていたんですね。そして、無謀にも、そういうのを自分自身も小説や映画として描けるなら描きたいな、とは思ったことはあるんですけど。それから8年ほど経ちますが、どこかで映画などでリアルに描かれなかな、って密かに期待していたのです。実は今年の夏に、この「自然災害科学」の特集記事の企画を練っていて、今年（2003年）は関東大地震から80年ですし、東海地震、東南海地震、南海地震などもホットな話題となっていますので、「東京の壊滅と再生 1923-20XX」という発想になっていました。そしてその内容を考えていたのですが、その時にいつものようにビックコミックを読んでいて、「太陽の黙示録」が始まって、タイトルから何の話かわからずに読み始めたら、いきなりこの「M8.8 京浜大地震発生」って言葉が目飛び込んできて、「う

わぁ、これだ」って思ったんですよ。それで、かわぐちかいじ先生の作品は以前から本当に好きでしたので、かわぐちかいじ先生が巨大災害を描き始めた、どうなっていくんだろう、と。そして本日のインタビューに至ったわけです。都市防災、地震災害、そして危機管理など我々の分野では、いろいろな専門家や研究者がそれぞれの分野で被害軽減のためにいろいろな活動をしているのですが、震災後の世界の動きを描ける能力というのは、やはり漫画家とか、小説家とか、映画監督にはかなわないと思うんですね。そういう意味では、この「太陽の黙示録」という作品を通して、震災後の未来像、ビジョンを描くというのは、凄く強いメッセージになるのですが、そのへんは意識されたことはありますか。

かわぐち：いや、そんな難しいこと考えてなかったですね（笑）。基本的に日本では、震災後にならるか、っていうのをドラマでやったのは、小松左京さんの「日本沈没」ぐらいしかないんですよ。本格的に、本当にそれをやろうとしたのは。僕もあれを読んで、映画も観ただけど、非常に面白かったんですよ。その中では、日本が沈没する、難民が発生する、で、世界各国にその難民の受け入れ国を作っていくというところで終わってるんですよ。でも小松さんにもう少し体力があったら、その後半ももう少し書きたかったんじゃないかな、と思うんですね。小松さん自身も言っているんだけど。

その難民の受け入れ国と、そこで生きていかなくてもいけない日本人難民がどうなるか、そのいろいろな国によって、その状況も違うだろうしね。そういうところを書きたかったんだらうなと思うんだけど、あの小説は描かなかった。描いていない。だから、自分はそこをも含んで描きたいなと思ったんですよ。どうしても、その、日本の国土があれだけ喪失してしまう、その1億何千万というその人口が、実際に難民として流失していく。そういうのは日本人は今まで経験していないわけですよ。その新しい状況に直面したときの日本人って何だろう、どうなるんだらうな、と考えて

みたいんですよ。意外に強かったりとか、意外にもろかったりとか、そのどちらもありリアルだなと思うんだけど。そのへんを僕も知りたいし、読者も一番知りたいところじゃないのかな。

村尾：かわぐち先生の作品を読んでいると、読者として「あ～、やっちゃったよ！」という瞬間があるんですよね。たとえば、「沈黙の艦隊」のときは、主人公の海江田四郎が船舶事故で死んだと思わせておいて原子力潜水艦を奪って実は生きていた瞬間ですね。また「ジパング」では主人公の草加拓海が溥儀を撃ってしまっただけで歴史を変えてしまう瞬間などですね。しかし、これらの二つの瞬間と「太陽の黙示録」におけるそれとは根本的な違いがあるんです。つまり「沈黙の艦隊」と「ジパング」はフィクションであり、なかなか実際には起こらないことだと思うんですよ。一方、「太陽の黙示録」でテーマとなる大地震などは明日にも現実に発生するかも知れないわけで、かなりリアリティーのあることだと思うんです。「太陽の黙示録」ではこの「やっちゃったよ」というのが最初にやってしまったんですよ。

かわぐち：もう、いきなり？（笑）

村尾：ええ。

かわぐち：始まってすぐに。（笑）

村尾：そしてこの瞬間から物語が始まるわけです。それですね、現実に起こりそうなことを題材とする難しさというのがあると思うのですが、そのへんの苦労話とかがあつたら聞かせていただきたいのですが。

かわぐち：そうですね、あの・・・まあ、どう見ても嘘っぽい、嘘だよなというようなドラマは創りたくないんです。いやこれちょっとリアルだなと思わせたいんでね。その状況ではどうなるんだろうというのをいろんな資料で補強しなきゃいけないんですよ。その資料集めはそんなに苦労じゃ

ないんですよ。それは楽しいんです。いろんな事を自分が知ることができるわけだから。非常に楽しいんです。それよりも、どんな話であってもそうなんだけれども、主人公を主人公たらしめる生き方を創ること、提示することが一番の苦労なんです。「太陽の黙示録」では大震災という状況について、いろいろと調べていくのは全然苦労ではない。それは楽しい。その中で主人公をどう動かすかっていうのが一番の苦労なんです。例えば「沈黙の艦隊」のときは、海江田四郎という艦長を設定して、彼は常人離れた、非常に天才的な頭脳を持っているというような設定にしたんですよ。そうすると「うおっ、嘘！いや、さすがに海江田だな。」というような天才的な行動なり言動がいるんですよ。それを読者に提示できないと、彼が天才であるということがどっかで崩れてくるんですよ。彼は天才であるという状況をまず設定して、つまりその天才でなければ、あのアメリカとの関係とか、公にしてしまった原子力潜水艦の存在を取り巻く障害を乗り越えていくことはできないだろうという状況を設定して、その天才ぶりをどう描くかっていうのが一番の苦労だったんです。今回の「太陽の黙示録」では、これ今言っちゃって良いのかな（笑）、三国志をね、やろうと思っただけなんです。日本列島が地震により変形・喪失し、分断されてしまう。その後の世界にね、三国志の主人公たち、劉備玄德や曹操を登場させられるんじゃないかとね。近未来の三国志を、日本列島分断後のアジアを舞台にやろうかなとね。だから「太陽の黙示録」の主人公は劉備玄德がモデルなんです。三国志の劉備玄德って、まあ、読者も多いし、ある程度どういう主人公になっていくのか予想が付いているんですよ。その劉備玄德らしさを主人公に託していく、見せていくっていうのが一番苦しいですね。それは「沈黙の艦隊」で、主人公である海江田四郎の天才ぶりを描いていくのに苦労したのと同じです。これまで（2003年10月まで）は震災が発生してから15年後の状況を描いてきたんですが、11月からは日本が震災直後よりたどった15年間の軌跡を描いていきます。そこでどのように日本が North Japan と Sou

th Japan に分断され^{註2)}、その後でどういう状況になっていくのか。この日本編では、日本の置かれた状況がリアルに出てくるわけですが、そのために自分でもいろいろと調べていて、どうなっていくのか期待もしているんです。漫画家としての苦労は、その中で主人公たちをどう動かしていくか、ということですね。つまり劉備玄德をモデルとした主人公なら劉備らしさを失わずに、なおかつ、みんなが思っている劉備よりもっとすごい劉備を描きたい、というのがあるんですよ。らしさをね。

村尾：日本編を含む今後の展開で、主人公を生かしていくために状況をどのように設定していくかというのは、楽しみでもあるわけですね。

かわぐち：そうですね。そこが一番の楽しさであり、苦労でもある。

3.3 日本と近隣国

- 台湾は日本が統治していた時代が長くて、日本人の受け入れということに関しては、スムーズにいくだろうと思ったんですね

村尾：先ほど、「沈黙の艦隊」を例にあげて、先生の作品の作り方として、まず描き始めて、徐々に話が展開していくという話をお聞きました。現在、台湾編がおわり、日本編が始まろうとしています^{註3)}。ここまで描かれてきて、ご自身の中で、作品のテーマとしてどのような変化があったのかお聞かせ願えますか。

かわぐち：そうですね。これから震災直後を描いた日本編が始まりますが、ようやく本編だなという感じなんです。最初はね、日本列島が分断されたところから始まって、すぐにこれから始まる日本編のドラマが始まる予定だったんだけど、その前段階として台湾での震災後 15 年が経過した難民のいろんな出来事を描き始めたら、あの、長くなったんですよ（笑）。描いてるうちに。そこを

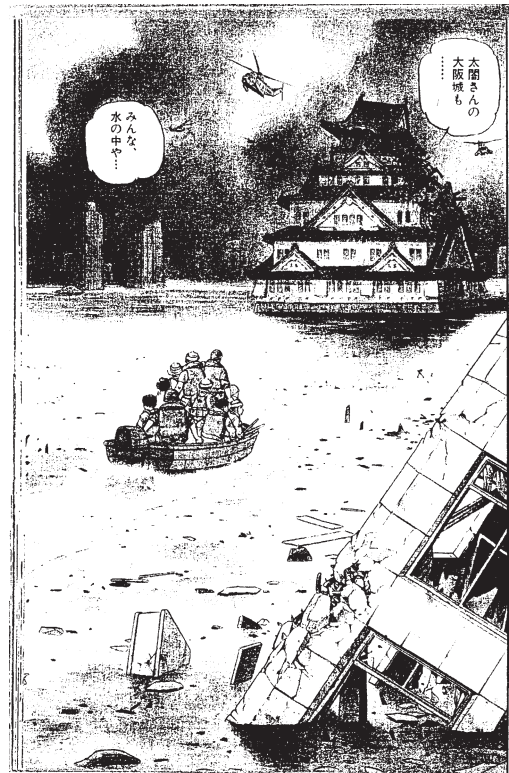


図 3-3 ©かわぐちかいじ『太陽の黙示録』
(小学館ビッグコミック連載中)

こう、サラッとこういうことがありました、っていうだけの、それだけの記述だけで終わらせないようにしようと思ったら長くなっちゃってね。じゃ、台湾での難民が経験したその中身は何だったんだろう、というところをドラマにしていこうと思ってしまったんです。そこは本来もっと短くなる予定で、いわゆるプロローグだったんですよ。これからの日本編では、劉備玄德をモデルとした主人公と対立軸をなすもう一人の主人公が登場ってきて、彼らのぶつかり合いを描くんですけど、ようやくそのスタートラインに立ったんですよ（笑）。ところがね、これから日本編が始まって、ある程度の出だしのイメージっていうのがあるんだけど、描いていくうちにいろんな問題がもっとリアルな形で出てくるんじゃないかな。それがまた楽しみなんです。

村尾：これまでの物語で、登場する国として、日本はもちろんのこと、中国、アメリカ、台湾が出てきます。ここまでは日本の避難民の受入先として台湾を、一つの大きな舞台にされているわけですが、あれは台湾でなくてはいけなかったのでしょうか？

かわぐち：まあ、アジアのどこかの国であれば良かったなと思うんだけどね。台湾でなきゃいけないという、強い理由というのはなかったと思うね。基本的に台湾は日本が統治していた時代が長くて、日本人の受け入れということに関しては、スムーズにいくだろうと思ったんですね。でも、その台湾でさえ、いろんな台湾の国民と軋轢が起こってしまう。じゃ、他の国だったらもっとすごいんじゃないのかな、とね。受け入れにそんなに支障がなかったはずの台湾でさえあれだけのことが起こる。となると、他の国ではもっと生きにくいことになっているんだろうと。これから始まる日本編では、基本的にアメリカと中国が日本を分断統治していく統治国になっていくんだけど、中国との距離の問題ですとかいろいろありますから、台湾をあそこで登場させて、台湾という国を描いておくのは、読者に対してイメージさせておくという意味でちょうど良かったかなと思いますね。

村尾：私自身、1999年の台湾集集地震の後、被災調査をして、現在は復興の調査研究をしてるんですね。そして先月9月にも台湾に行ってきたんですが、私のフィールドは集集という震源の近くの町なんです。そこには日本統治時代に作った日本式木造建築の駅があって、それがその地域の一つのランドマークになっているんです。

かわぐち：そこは、地理的に言うと北の方ですか。台北に近いんですか。

村尾：台中から少し山のほうに入ったところです。

かわぐち：はあ、はあ。

村尾：9月の調査が5回目だったんですけど、そこで感じるのは、被災の直後に行ってもかなり日本から来た我々を好意的に受け入れてくれたんです。調査をしていると被災者の方が、「あぁ、日本から来たのか」と。それで、おじいさん、おばあさんは日本語が話せますから、日本語を一生懸命、久しぶりに使えるっていう喜びで話しかけてくれました。この4年間の調査で、住民の方々といろいろ接触して見えてきたものがありました。我々が利用しているホテルの横に保育園があって、ここでは日本の幼稚園で子供達が歌っているような日本の童謡が中国語で流れていたり、また住民の30、40代の人と話をすると、「私たちが小学校の夏休みは、日本人が教えてくれたラジオ体操をやって育ったんだよ」と、かなり好意的に日本の文化が浸透しているんですね。そして9月の調査では、この「太陽の黙示録」の台湾避難の話を読んだ後ですから、台湾の街をいろいろ眺めてですね、夜一人で食事をした時にお酒を飲んで考えたのですが、「もし本当にこういう状況になったら、僕は台湾で生きていけるんじゃないかな。もし日本にいられなくなってひとつしか国を選べないとしたら台湾への避難を選択するかも知れないな。」と思ったんですよ。そんなことを考えていたら、かわぐちさんの設定の良さというか、そんなものを感じたりしました。

かわぐち：高砂族っていますよね、13か14族あると思うんですが、実際僕らも取材の時に、タイアル族の村へ取材に行って、そこで、おじいさん、おばあさんがいて、日本語もペラペラで、カラオケで日本の曲を歌っているような人達と接する機会があったんですよ。話を聞くと、台湾の国内でのせめぎ合いとか民族的なせめぎ合いがずっとあって、彼らなりにいろんな気持ちがあって、その歴史はすごく日本も関わっているわけですよ。非常に面白いんですけどそこを作品に描いていくと、話が違ってくるんでね(笑)。結局、そこは一応触れられないでしたんですけど。でも台湾自体の抱えているテーマって面白いですよ。何であそこで日本文化が根付いているのか、ってね。忘れてい

ないんですよ。僕らが日本の観光客として普通にこう歩いていて、日本語喋っているじゃないですか。そしたら、寺院とかで老人が話しかけてくるんですよ。「あの、日本人ですか？」って。日本語喋りたくてしょうがないっていうおじいさんが多いんですよ。つまり、日本の統治時代の悪感情というかね、圧政者としての受け取られ方だけではない何か台湾に根付いているのではないのでしょうかね。やっぱり日本人は色んなものを壊さないで作りあげてくれたっていうね、感謝みたいな感情もあるなと思いましたね。

村尾：そうですね。日本統治時代に、確かに統治はしてたんですけど、日本が作ったインフラによって、現代の台湾の成長があるともありますし。

かわぐち：日本がインフラをきちんと整備したというのは、その土地の人にとってはものすごく大きいんでしょうね。そこを統治するためのシステムの一環だったにせよ、それを造ってくれる、それが出来上がるっていう、インフラを整備してくれるっていう、その事自体に対する土地の人の感情っていうのは、ちょっと想像できないですよ。想像以上のものがあるんでしょうね。やっぱり、感謝の念があるんじゃないかな。今ね、満州のあそこも、インフラは日本が造ったものをそのまま利用しているっていうしね。今使われている建物とか道路とかインフラとかって、ほとんど日本が作ったものです。あそこは政治的にもいろいろとあって、中国共産党が日本の侵略時代を政治的プロパガンダに利用しようとしていることだけではないようなね。あそこに住んでいる人々の感情もいろいろとあるんじゃないかな。

村尾：さきほどタイアル族の話がありましたけど、私もタイアル族のいる地域に被災の後に行ったのですが、いろいろ聞いて驚いたことがあります。他の高砂族もそうなのですが、最近若い世代に少数民族としてのアイデンティティが失われてきているんですよ。若い世代から民族の言葉や文化が失われてしまっているんです。そこで地震がお

きた。建物とかいろんなものが被害を受けてしまって、皆が被災を同じ共通体験として認識しはじめた。そして被災したけど自分たちは頑張るぞ、っていう思いが生まれたんですね。同じ民族の人々が抱いたその勢いを、少数民族としてのアイデンティティ回復にうまく繋げたいということを書いていたんですよ。かわぐちさんも見られたかも知れませんが、タイアル族の地域に竹の住宅があります。そこでは若い人たちに、失われた部族の言葉を教える教育の場を設けたりもしていました。また、集集から少し離れた日月潭という湖周辺に邵族という少数民族がいます。邵族も、タイアル族と同じように失われていた民族のアイデンティティを回復するために、竹の仮設住宅を作って、それで一つの村というか場所を設けて、民族の内部や台湾政府に対して民族復興運動みたいに働きかけたんです。台湾では以前は九つの部族が公式に認められていたんですけど、その運動の結果、邵族が10番目の部族として認められたんです。ですから、地震などの災害を契機に被災者の民族性の意識が高まるというのは普遍的なことかも知れませんよね。「太陽の黙示録」でも日本人としての民族性の回復というものもひとつのテーマになるかと思うのですが。

かわぐち：まっ、それについては今度始まる日本編でもっと描き込んでいきたいなと思っているんですけどね。今の日本の状況がガラッと変わったときに、日本人はそこで生き生きするのか、それともボシャッといくのかというのは、両方ありそんな感じがするじゃないですか。それに近い状況と言えば、太平洋戦争の時にはあったんだけど、国土が分断されたってわけじゃないですよ。だからその、生きていく困難、なおかつ国土が失われるところに、日本人のアイデンティティというものを求めたときに、より強く求めるのか、それとももっと凄い諦観があってね、美しいまま滅びていこうというようにいくのか、なんか両方がリアルなんですよ（笑）。その両方をうまく描いていくと、日本人の一番根本にあるものがね、出てきそうな感じがするんですけど。

- 日本人の二面性をね、分断という形で顕在化させたいんですよ

村尾：「沈黙の艦隊」のときは、アメリカに対する依存から脱却できない日本に対して、批判・・・という強い表現になってしまいますが・・・。

かわぐち：ストレスは感じていました。

村尾：「おまえら、このままじゃいけないだろう！」という日本に対するメッセージがありました。それから「ジパング」では、「戦後、日本が歩んできた世界は正しかったのか？」という、問題提起があったと思うんですけど、「太陽の黙示録」はどういう視点で日本をとらえていらっしゃるんですか？

かわぐち：あのね、最近考えているんですよ。初めのころはそうでもなかったんだけど、何で分断を考えたかというところに立ち戻っていくと、日本人の持つ二つの要素があるわけですよ。その二つの要素をはっきりさせたいわけですよ。例えば太平洋戦争に突入していった日本人がいますよね。いわゆるファシズム、軍国主義にうわっと煽られて一塊になって、ファシズムの列の中にうわっとまとまっていった日本人の側面ですよ。もうひとつは、今度は敗戦があって、アメリカが来て、そのファシズムの時代を嫌悪し、否定してしまう側面。で、「これからは民主主義だ」というような主義があって、そこで生き生きして、エコノミックアニマルになっていく、そういう日本人も日本人なんです。日本人の要素として両方あり得るわけですよ。どっちの日本もリアルなんです。ですから、一人のカリスマによって軍国主義が固まって、そこに縛られていく。いや、縛られるというより縛っていくんですよ、自ら。そういう生き方をしてしまう日本人も今の自分たちの中にあるわけですよ。そんな遠い過去ではなくて、これからも多々。そういうことで縛っていく感情をどこかで捨てないで持っていると思う。一方で、そういうものを嫌悪して、そういうのをヒステリックに怖がって、自由というものに対する有難さを

強く感じている日本人も日本人なんですよ。その日本人の二面性をね、分断という形で顕在化させたいんですよ。そんなことを最近考えていて、これいけるんじゃないかと思っているんだけどね。そういう部分をうまく表現してね、かなり面白いドラマとして読者を巻き込めるんじゃないかな。自分も興味持って描けるし。

3.4 日本における危機管理

- 日本人は防災に真剣になれないタイプの感じがするんですよ

村尾：私の専門分野から言うと、この「太陽の黙示録」の中の一つのキーワードは「危機管理」なんです。先生自身「危機管理」というものは意識されていますか。

かわぐち：「危機管理」・・・、そうですね・・・。

村尾：例えば、これまでの作品で「日本」を描いていらっしゃるわけですが、島国っていうのが一つのキーワードですよ？

かわぐち：うん。

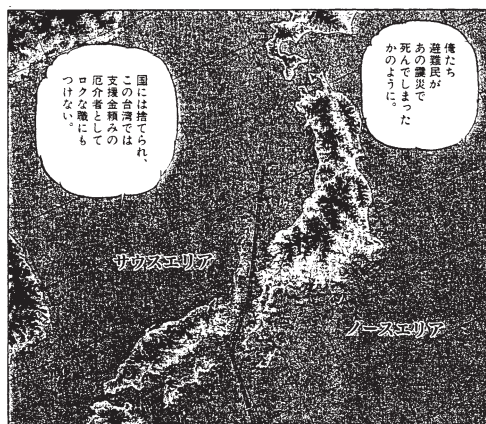


図 3-4 ©かわぐちかいじ『太陽の黙示録』(小学館ビッグコミック連載中)

村尾：日本の隣に中国がありますが、中国は大陸の中に位置していて、もの凄く広い国土を治めなくてはいけなかった歴史があるわけですよね。そのために、常に近隣諸国からの侵略に備えて、常に戦争を意識して、国を守っているという危機管理の意識が強かったのではないかと思います。

かわぐち：あの阪神・淡路大震災は1995年ですよね、だから今から8年前ですね。その同じ頃にオウムもサリンを地下鉄で撒いたじゃないですか。あの経験で、けっこう大きかったと思うんですよね。そういういろんな経験を通して、地震やテロに対応しようとする意識は、どこかであると思うし、どこかで育ってきたとも思うんですよ。なんか、なんとかしなきゃという気持ちはあるんだけど、忘れたっていう気分もどこかにありますよね、日本人には。そして、何かが起こってしまってから、「ああ、やっぱりな」というような感情がある。なんかね、日本人は防災に真剣に出来ないタイプの感じがするんですよ。

村尾：日本は島国で、海に囲まれていて、海という存在が諸外国からの侵略をある意味で防いでいてくれたというのがあります。また比較的同じ系列の民族同士が集まっていて、村を築いて、同じ文化を共有して、和を尊とした背景がありますよね。私自身の考えですと、そこで危機管理の甘さみたいなものが遺伝子レベルであるのかな、と思うんですね。かわぐち先生の日本を背景にした作品の中では、「島国」とか「海」というキーワードもありますから、そこで、今私がお話した危機管理の話と関連して、展開するのかなと少し期待してはいるのですが。

かわぐち：なんかね、諦観と言いますかね、ちょっと諦めに似たようなものが少し日本人にはあるんじゃないですかね。例えば、「自然災害に対して抵抗してもしょうがないな」というね。「もう来るんだからしょうがないな」というような、諦めに似た感じがどっかにあるんじゃないですかね。要するに防災って生き残るためのパーセンテージ

の確率を上げることでしょ。そんな1パーセント2パーセント変わったってしょうがないよ、っていうようなね。そうじゃなかったら、この間、週刊朝日で例の地震予知の話があって、地震が来るぞ来るぞという話でちょっと緊張したんだけど、もうおそらく忘れているでしょ。「地震が来たら来たときのこと」というような感覚で、市民は生きているんじゃないんですかね。自然災害に真剣に出来ない体質がどっかにあるのかな、と思っているんですけどね。どうなんですかね。

村尾：国民性って凄くあると思うんですよね、トルコの地震の後にも調査して、被災者にヒアリングしたことがあるんですが、あちらはイスラムで、他の中東諸国に比べればイスラム色は薄まるんですが、いろいろなところで「アラーの神の思し召し」だと言うんですね。例えば、ビルが倒れてたまたま生き残った人がいるわけですよ。「良かったですね。」という「これはアラーの神に助けられたんだ」というんです。防災の研究者の立場として、「怖かったでしょ。次の地震でこうならないようにちゃんと建物を補強しておかないといけないんじゃないですか。」と聞くわけですよ。そしてその人はどう答えるかという、「いや、おそらく自分は耐震補強はしないだろう。同じ建物に住んでいて、もし次の地震で死んだら、それはアラーの神がそうさせただけだろう」という、そういう文化なんですかね。先生がおっしゃられたように、日本にも日本独自の雰囲気があるのかも知れないですね。

- 防災って夏休みの宿題と同じだよ

かわぐち：日本人の諦観の根本は何かなと思うんだけど、土地に対する所有の意識と関係している気もするんですね。例えば、ある日本人がある土地を持っていたとしますね。これは自分の土地なんだと思っていれば、その土地が失われることが嫌で、土地に対して凄く執着しますよね。失われるの嫌でしょ。でも「その土地は、今は一応自分がお金も出して、税金も納めて自分のものになっ

ているけど、実際は違うんだよ」みたいなところがどこかにあると、「その土地が失われても仕方がないな」と思うじゃないですか。日本人のいろんな物に対する所有感覚がどこか希薄なんじゃないかな。だから、ものが失われたり、何か問題が発生しても、それは「自分が所有しているものが失われるんじゃないで、自分がたまたまそこにいて、たまたま預かっているだけのものが失われるんだから、しょうがないよ。いいよ。」とね。地面が一番わかりやすいと思うんだけど、その地面に対する所有感が非常に低いんじゃないでしょうかね。ヨーロッパとかアメリカなんかに比べてみて。だからそれを喪失しないための方法論をものすごく考えるってことをしないんですよ。そこにね、防災がきちんと根付かない根本的な要因があるんじゃないですかね。それはちょっと暴論かも知れないですけど。何かが起きて、しばらくするともう忘れてる。「やんなきゃ、やんなきゃ」とはなんとなく思ってる。防災って夏休みの宿題と同じだよ。夏休みの宿題が出て、「やんなきゃ、やんなきゃ」と思っているんだけど、だんだん時間が迫ってきて、「まゝ 8月30日と31日の2日でやればいいや」とか、「何とかなるだろう」というね。実際には、日本に大地震が発生する確率は今も高いわけで、今年の暮れにも来るかも知れないなという感じがどこかにあって、つまり夏休みはもう終わりかけているんですよ。夏休みが終わるなという実感はあるわけですよ。「防災やんなきゃいけない。防災をきちんとやんなきゃいけない。」とされていて、それで例えば阪神・淡路大震災みたいなことが起こったら、たちまち神戸の震災のことを調べて、そこで何が大事だったかということ全部考えて、家庭では防災器具や生活必需品をまず揃えますよね。そしてさらに、いろいろなことをやんなきゃならないんだけど、まゝ明日にしようか、と。なんとなく、もう夏休みが終わりかけているっていう感覚はあるんですよ。8月30、31日がギリギリ宿題ができるリミットだとすると、25、26日あたりにきているなという感じ(笑)。でもね、真剣になれないんですよ。

村尾：危機管理という視点から見ると、アメリカとかよく戦争をする国は、戦争を通して国の危機管理体制がかなり出来あがっていると思うんですね。その点、日本は戦争って遠いどこか他の国の話ですから、意識が低い気がするんですよ。そういう戦争の身近さと、防災意識って一見違うように聞こえますが、危機管理というキーワードを介してみると繋がるんですよ。

かわぐち：戦争に関しても、日本はすごく危機管理の意識は低いですよ。意識が。それは国が危機管理をきちんとやらなきゃいけないというよりも、国民にも問題がある。今の自衛隊をつくっているのも日本の国民ですよ。だから国民がいい加減なんですよ。自衛隊は本来は軍隊なのに軍隊とは言わないでそのまま野放しにして、まゝ見ないことにしようという、その日本人そのものにも問題があると思います。日本人の何か体質的ないい加減さとか、さっき言った諦観とか、いろいろそういう物に執着しない特質がある。それはね、良さでもあり、弱さでもある。時代時代によって、その特質が弱さとしてダメだというふうに宣伝されたり、逆にそれはそれ以上主張しない、エゴイズムからどこか脱却できている強さとして、ある意味で美点として見られたりする。実際、北朝鮮の脅威っていうものがありますよね。だから本来もうちょっとミサイルとか原爆に対しての知識をね、日本人はきちんと持たなきゃいけないんだけど、それがありませんよ。ただ感情的に、あそこは嫌な国だなと思っただけでね。実際、核を持ってると宣言しているわけだから、撃ち込んできたらどうするの、と言ったときに、初めてそれに対応する。さっきの宿題の話じゃないけど、まゝ来てから考えようかっていう感じがね、日本人ってありますよね。

村尾：それは政治家だけでなく、普通の国民もそうですね。

かわぐち：そういう政治家しか育ってないわけで

すから。自分たちがもっとヒステリックな国民だと、あんな政治家なんて許さないですよ。どこか曖昧な国民性を持っているから、ああいう政治家が存在しているわけでしょ。だから日本人の根本のそういった感情や感覚の上に、今の防災システムっていうのがあるんじゃないですか。だからなかなか機能しない。どうして今の防災システムはうまく機能しないか考えてみると、なんかね、あの日常的にそういう防災を考えてしまうと、太平洋戦争のファシズムに被い尽くされた日本の感覚に近いような感じがするんじゃないですかね。日本人にとって、どこかに嫌だなという感があるんじゃないですかね。どこ行ったって、標語が出てくる。例えばね、街歩いていて、「気を付けよう、なんとかなんとか・・・(笑)」って、標語だらけの街を歩かなきゃいけないような感じもするし、地下鉄に乗ろうとすると、「地下鉄の脱出口はこちらです」というのが、もっと大きな表示で出てくる。それは当然ですよ。事故や災害はいつ来るか分からないわけだから。だけど、そういうのは見たくないっていう感覚が我々にはあるんですよ。太平洋戦争の頃にファシズムに被い尽くされて、凄く窒息しそうな風通しの悪さみたいなものがあったというようにね。なんかあの全体主義を嫌悪してしまう日本人の感覚がね、そういう道を嫌だと思ってしまうんじゃないですかね。

村尾：たとえば公園がありますよね。公園は基本的にスペースがあるわけですよ。防災的にもスペースがあることは良いことなんです。だけどそれを「防災公園」って言うてしまうと敬遠されちゃうんですね。だけど、災害時には水も必要だし、スペースも必要だし、緑も必要なんですよ。その緑とか水というのは平常時の快適な要素でもあるんですね。その平常時の快適性の中に、結果的には防災的にも良いものを如何に位置付けるか、っていうところが大事なんです。

かわぐち：でもその平常時に快適な要素ということを中心に日本人は忘れていきますよね。

3.5 防災の専門家や研究者に対する要望

- 専門家にはきちんと宿題を提出してほしい

村尾：我々都市防災に関係する専門家、研究者、そして行政の方々に対して言いたいことはございませんか。

かわぐち：もう言っちゃったような感じもするんだけど、政治家や専門家だけはね、被害を軽減するための夏休みの宿題をちゃんとやってほしいですよ。僕は8月30、31日で、2日でやるとしても、やっぱり専門家の人はきちんと夏休みのスケジュールを組んで、きちんと宿題をこなして提出してほしいな。それが一番。

村尾：「太陽の黙示録」の中で、今後は大災害から日本が復興していく過程を描かれていくと思うのですが、最後にその抱負というか、意気込みのようなものをお聞かせください。

かわぐち：かなり無責任な話をしているみたいな感じがするんだけど、先ほどお話しした日本人の持っている二面性とかね、そういうものを我々はもっと意識しないとダメだという感じがするんですよ。そうしないと、いろんな状況が起きたときに対応していくことがなかなか難しいなと思います。どうしても日本人が陥ってしまう感性っていうのかな、そういうものを自分で分かっていないと、無理をしてしまうような、無理をして苦しい



図 3-5 ©かわぐちかいじ『太陽の黙示録』(小学館ビッグコミック連載中)

思いをしてしまうような感じがしますよね。だから無理なく出来るものを、日本人はきちんと目を向ける、意識するっていうのが大事かなと思うんですよね。「太陽の黙示録」という自分の作品の中で、日本が分断されたハードな状況を舞台にして、そのへんを少しね、描き込んでいきたいなと思うんですよ。

村尾：そうですね。本日おうかがいした先生のお考えは、今後の作品の展開の中でいろいろとメッセージとして出せるような気がしますよね。

かわぐち：その出していける状況を設定できたような感じがするんですよ。だから非常に面白い物語になりそうだなと思っています。

村尾：これからも「太陽の黙示録」を楽しみに読ませていただきます。

かわぐち：はい、これからです。ようやくプロローグが終わり、作品の本題のスタートラインに立ったところなので。

村尾：本日はありがとうございました。
(インタビュー実施：2003年10月22日)

かわぐちかいじ：1948年尾道生 漫画家
代表作 「メドゥーサ」(小学館), 「イーグル」(小学館), 「太陽の黙示録」(小学館), 「沈黙の艦隊」(講談社), 「ジパング」(講談社) など, 第11回講談社漫画賞(1987年), 第14回講談社漫画賞(1990年), 第26回講談社漫画賞(2002年)を受賞。

村尾 修：1965年横浜生 筑波大学社会工学系講師
専門分野 防災空間計画学, 1995年兵庫県南部地震の実被害データに基づく建物被害評価に関する研究ほか

註1) 太陽の黙示録：2002年夏 M8.8の京浜大地震が首都圏を襲い、続いて富士山噴火、東海、東南海、南海地震が発生し、日本列島が分断される。その後直面する様々な問題と復興の過程を描く。世界における日本とは、日本人という民族とは何か、独自の切り口で日本の将来を問う話題作。(2002年夏よりビッグコミック誌(小学館)にて連載中)

註2) North JapanとSouth Japan：「太陽の黙示録」では、琵琶湖周辺部を中心として日本列島が分割され、大阪、京都、琵琶湖が水没するという設定になっている。その結果、日本国は中国が統治するNorth Japanとアメリカが統治するSouth Japanに分断されてしまう。

註3) 台湾編と日本編：物語は、2002年に巨大地震が発生した後、15年経過した2017年に突入する。そこでは台湾に避難してきた日本人と台湾住民との葛藤が描かれた(台湾編)。そして2003年11月連載分からは地震直後の日本へと物語は後戻りし、この15年間に何が起きたのかが描かれている(日本編)。